凡例

一、本書は高等女學校、府縣立師範學校女子部、中學校其他之に相當する諸學校の東洋歷史教科書に充て、及び一般初學者の東洋歷史を修めんとするものの參考に供せんとして編纂せり。

一、本書は東洋諸國の盛衰興亡を叙述するに於て支那を主とし自餘を客とし重要なる事實を記載し、殊に皇國に關係せる事實に注意し、已に學び得たる國史と相待ちて智德を涵養せしめんことを希圖せり。

一、本書の內容は每週一時を以て一學年に修了し得べきを率とす。

一、年代は皇紀を用う、但歷代及び年號と對照せしめんが爲めに卷末に年表を附せり。

一、本書には諸所に繪畫等を挿入して記憶に便にし地圖を附して

學習に便ならしめたり。

一、卷尾に各種の表及び索引を附して講習の便に供せり。

一、本書中に挿入せる地圖に關しては木崎盛政氏の補助を得たること多し爰に之を謝す。

明治三十三年十一月　　編者識

目次

第一篇　支那の古代　一

第一章　唐虞三代　一

第二章　春秋戰國　四

第三章　周代の文物　七

第二篇　秦漢三國時代　一〇

第一章　秦の治亂及び漢楚の爭　一〇

第二章　漢室の確立　一三

第三章　漢と諸外國　一六

第四章　漢の末路　一九

第五章　後漢と諸外國　二〇

第六章　佛教の傳來　二三

第七章　後漢の末路及び三國　二四

第八章　秦漢三國時代の文藝　二七
第三篇　晉及び南北朝
第一章　兩晉の治亂　二八
第二章　南北朝の興亡及び突厥　三一
第三章　兩晉南北朝時代の文藝　三三
第四章　朝鮮と佛教の東漸　三四
第四篇　隋唐時代
第一章　隋の治亂及び唐の確立　三七
第二章　唐と諸外國　三七
第三章　武韋の禍及び安史の亂　四〇
第四章　唐の衰亡　四三
第五章　隋唐時代の文藝　四六
第五篇　五代及び宋の時代　四七
第一章　遼と五代及び宋との關係　四九
第二章　宋遼夏金の爭　五二
第三章　南宋と金との爭　五五
第四章　五代及び宋時代の文藝　五七
第六篇　蒙古種の隆盛　五九
第一章　蒙古の西征及び金の滅亡　五九
第二章　元の一統及び交通　六二
第三章　諸汗國の情況並に明の勃興　六五
第四章　永樂の治及び土木の變　六九
第五章　元明時代の文藝　七一
第七篇　歐羅巴人の交通時代　七二
第一章　西亞細亞の形勢并に歐羅巴人の東渡　七二
第二章　明の外寇　七五

第三章　清國の確立　七八
第四章　高宗の外征　八一
第五章　康熙乾隆時代の制度文物　八三
第六章　露西亞と英吉利との東略及び鴉片戰爭　八五
第七章　長髮賊の亂及び英吉利佛蘭西との葛藤　八八
第八章　英吉利露西亞佛蘭西の經略　九一
第八篇　極東の近時　九四
第一章　日本と朝鮮の開國　九四
第二章　朝鮮に於ける日清兩國　九七
第三章　日清戰後の現情　九九

東洋史略

文學士　小川銀次郎編

第一篇　支那の古代

第一章　唐虞三代

大古

黃帝

第一節　支那黃河の流域に肥沃の地あり。大古、漢族西北方より此地に移住し、人口の繁殖するに從ひ、數多の部落を立て、各酋長を戴きて、漁獵牧畜、農耕を營み、又醫藥、紡織の業をも開きたりといふ。

第二節　紀元前一八〇〇年の頃、酋長に黃帝ありよく諸部落を征服して、領土を江北に張り、文字を作り、舟車を製し、以て支那統一政治の基を定め、茲に漸、文化の端緒を啓け

唐虞

夏

殷

り。

第三節　黄帝の後帝堯帝舜相踵いて出づ。帝堯は大聖にして君德高く曆法を定め民業を勸め、後舜が孝悌の德あるを聞き、擧げて大政を委ね、遂に位を讓れり。舜亦聖德あり、賢才を擧げて内治を改良せしかば、天下大に治まる。世之を並び稱して唐虞の治といふ。

第四節　此時天下に洪水あり、禹舜の命を奉じて水土を平げ、産業を起し、功によりて舜の禪を受け、國を夏と稱す。禹は其子啓の賢なるを見、立てゝ嗣となし、始めて世襲君主の制を定めたり。然れども其後王桀に至り、無道にして民心を失ひしかば、遂に殷王湯に滅されたり。

第五節　湯已に夏を滅し賢相伊尹を擧げて之に國政

周の興起

周の全盛

を委ね、天下等しく悅服したりしが、其後王紂に至り淫佚甚しく、箕子等の忠諫を用ゐざりしかば、諸侯皆遂に離叛するに至れり。

第六節　此時周に侯昌あり、太公望呂尙を師とし、德を修め士民を愛撫せり。昌の妃、太姒、亦婦德高く、太子發及び周公旦を生めり。昌歿して太子發位に即き、紀元前四六二年、諸侯を率ゐて殷を滅せり、之を周の武王とす。先王昌を諡して文王といふ。

第七節　武王鎬に都し、大に同姓功臣を封じ、公侯伯子男の爵を與へ、茲に封建の制度を完成せり。武王歿して子成王立つ。周公召公共に政を輔け、禮樂を作り、制度を定め、又洛邑を建てゝ天下の諸侯を會せり。是に於て文物大に興り、周

周室の東遷

室全盛を致せり。

第八節　然るに其後、周室、漸衰へ、西戎來り侵し、かば、紀元前一一一年、平王遂に都を洛邑に徙して難を避けたり、世之を周室の東遷と稱し、これより以後を東周の世といふ。

第二章　春秋戰國

春秋五霸

第一節　平王の東遷以後凡二百四十年間を春秋の世といふ。此間戎狄屢内に侵入し、諸侯互に相併呑せり。而して其最強大なるもの自霸を稱し、天子を挾みて以て諸侯に號令せり、齊の桓公、宋の襄公、晉の文公、秦の繆公、楚の莊王、等即、是なり、世之を五霸と稱す。

齊桓宋襄

第二節　齊の桓公は管仲を用ゐて國力の富强を致し、諸侯を會して霸を東方に稱せしが、其歿後霸業忽衰へ、宋の襄公之に代りて西隣に霸業を成せり。

晉秦楚の霸業

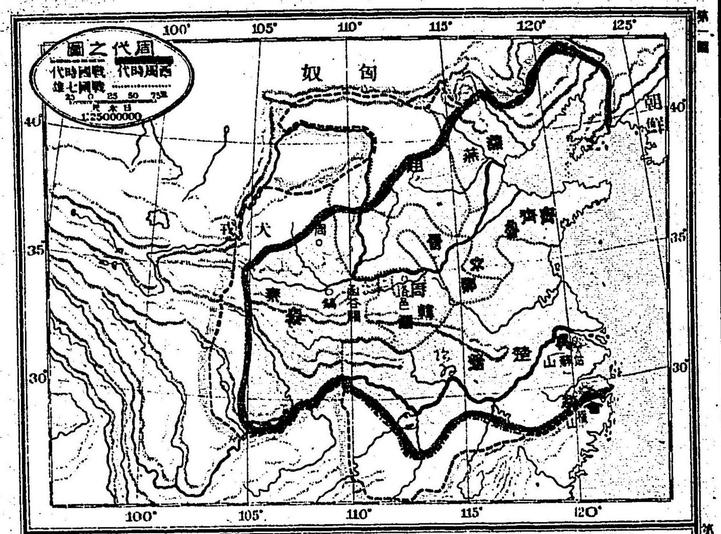
第三節　時に晉の文公は河北に起りて百有餘年の霸業を開き、秦の繆公は霸を西戎に稱して之と爭ひ、楚の莊王は亦晉を破りて南方に雄飛せり。

吳越の爭

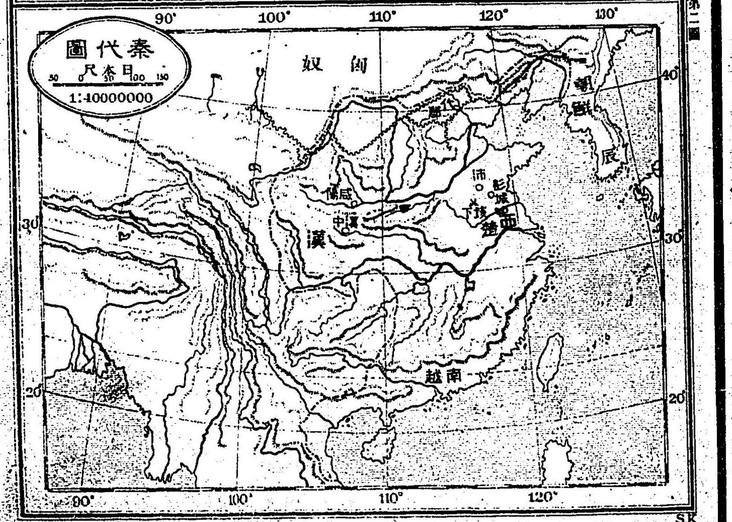
第四節　其後吳越兩國各霸を東南に爭ひ、越王勾踐は范蠡を用ゐて吳王夫差を滅し、北進して遂に又霸を稱へたり。

戰國七雄

第五節　周室の威かくの如くに衰へ、諸侯復尊王を稱へざるに至り、燕は北に據り、秦は西に雄視し、楚は南方に蟠れり、趙、韓、魏は晉を滅して之を分領し、齊の田氏亦姜氏に代りて東海に國す、紀元二五八年には爰に七雄國を生じて互



第一圖



第二圖

人才輩出

に相爭へり、世之より後を戰國の世といふ。

第六節　是に於て、諸侯爭うて天下の人才を招き、各自國の富强を圖れり。當時齊には田單、孟嘗君あり、趙には廉頗、藺相如あり、楚に春申君あり、魏に信陵君あり、燕には亦樂毅あり、皆智を磨き、武を練り、地を拓くに努めしが、遂に秦の旺盛を制すること能はざりき。

合從連衡

第七節　秦の孝公、商鞅を擧げて益富强を致してより、秦は漸、六國を併呑するの勢ありしかば、蘇秦は合從論を唱へ、六國の兵を合せて秦を擊たんことを說き、張儀は之に反して連衡策を立て、六國相並びて共に秦に仕へんを論ぜり。

秦の天下平定

第八節　かくて秦は白起等を用ゐて三晉を討ち、紀元四〇五年、遂に周の赧王を降し、又李斯の策を納れて敵國の

君臣を離間し、兵を出して六國を滅し、紀元四四〇年に至りて、殆天下を一統せり。

第三章　周代の文物

制度

第一節

周公禮樂を作り制度を定てより、支那の文物頗完備し、永く後世の模範となれり。當時中央政府には六官を置きて大政を掌らしめ、井田の法を定めて租を納めしむ。又大小學校を設けて教育を盛にし、兵制を定めて天子六軍を率ゐ、諸侯は爵によりて差等あらしむ。されど、周室の衰ふるに及び、是等の制漸頽廢するに至れり。

孔子

第二節

春秋戰國の世、思想に束縛なく、言論また自由なりしかば、學者輩出して互に相辯難せり。春秋の世、魯に孔

子あり、儒家の祖なり、夙に周道の衰へたるを慨し、春秋を修めて、名分を明にし、弟子を集めて仁道を説けり、弟子三千餘人、その六藝に通ずるもの七十二人。就中、顏淵、子路、曾參等名最著はる。有名なる論語は即孔子の談論を編めるものなり。孔子一八二年に歿す。後世廟を作りて聖廟と稱し、歷代の帝王釋奠して王者の禮を以てす。

孔子の像

儒家

第三節 孔子の孫に子思ありて、中庸を著し、孟子は慈母の教訓を受けて德高く仁義を説きて亦儒道を祖述せり。

老莊諸家

第四節 孔子魯に出でし頃、楚には老子あり、自然無爲を尚びて禮法に拘泥するの不可を論じ、後、列子、莊子之を祖述せり、世之を黃老の道といふ、後世の道教は蓋是より脫化せるものなり。其他墨子、楊子、孫子、韓非子等皆一家言を立てて名あり。

書物

第五節 當時紙の製法未だ知られず、一般に竹木又は布帛を以て其用を辨じたり。書籍は率、漆液を以て字を竹簡に書し、韋を以て之を編み、以て卷物となせるにて、文字は大篆のみにして隷楷は未だ用ゐられざりき。

衣服

第六節 當時の衣服は衣と裳とより成り、袖廣く裾寬かなるを常とせり。原料は、絹布、麻布等を用ゐ、品位の高下貴賤により種々の染色繡箔を施せり。

禮法

第七節　禮法は封建の世に大に發達し、冠婚喪祭の儀禮より、會同應對の禮に至るまで、整然として、備はれり。

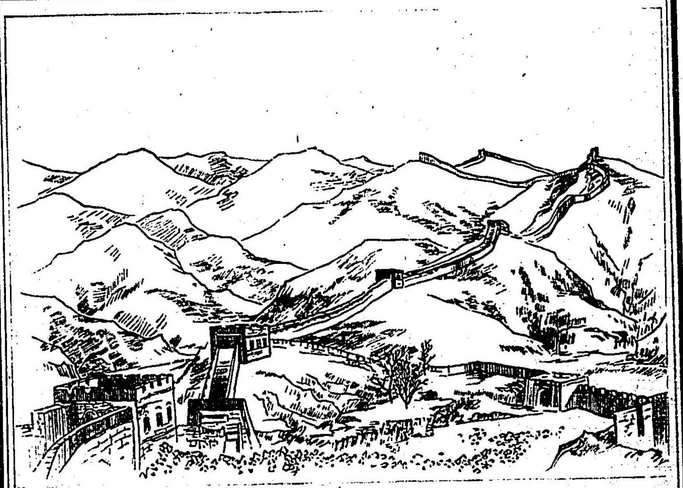
第二篇　秦漢三國時代

第一章　秦の治亂及び漢楚の爭

秦始皇の改革

第一節　秦王政、天下を一統して、維新の政を施く、王號を更めて皇帝と稱し、謚法を廢して自、始皇帝と稱す、天下を分ちて三十六郡とし、守、尉、監を置きて之を治めしめ、悉く封建の舊制を全廢せり。帝民間の兵器を收め、富豪を咸陽に徙し、阿房宮を造營して以て帝室の尊嚴を示し、各地に巡遊し、山川を封禪し以て功德を紀し、長久を祈れり。又丞相李斯の策を納れて、天下の圖書を焚き、書生の法令を非議するものを坑にし、鋭意改革の奏功を期したり。

領土擴張



萬里の長城の圖

第二節　是より先、戰國の世、匈奴（キョウド）屢北邊に寇せしかば、始皇は蒙恬を將として之を討ち萬里の長城を築きて北邊の武備を嚴にし、南越を略して三郡を置けり。是に於て、秦の領土大に擴がり、北は沙漠より南は安南に至り、その威名遠

く外國に振ひけれは、外國人秦を訛りて支那といひ、遂に今日の國號となるに至れり。

秦の滅亡

第三節　然るに、始皇の土木と外征とは、人民をしていたく徭役に苦ましめしかは天下皆亂を懷ふに至れり。始皇歿して二世皇帝立つに及び、權臣趙高專横を極め、刑罰を嚴にせしかば、叛亂諸處に起り。楚の舊臣項羽は兵を江東に擧げて西進し、劉邦は沛より起りて秦を衝けり。是に於て、趙高は誅を恐れ、帝を弑して子嬰を擁立せり。劉邦乃秦軍を破り、子嬰を降し咸陽に入りて悉秦の苛法を除けり。秦亡ぶ實に四五五年なり。

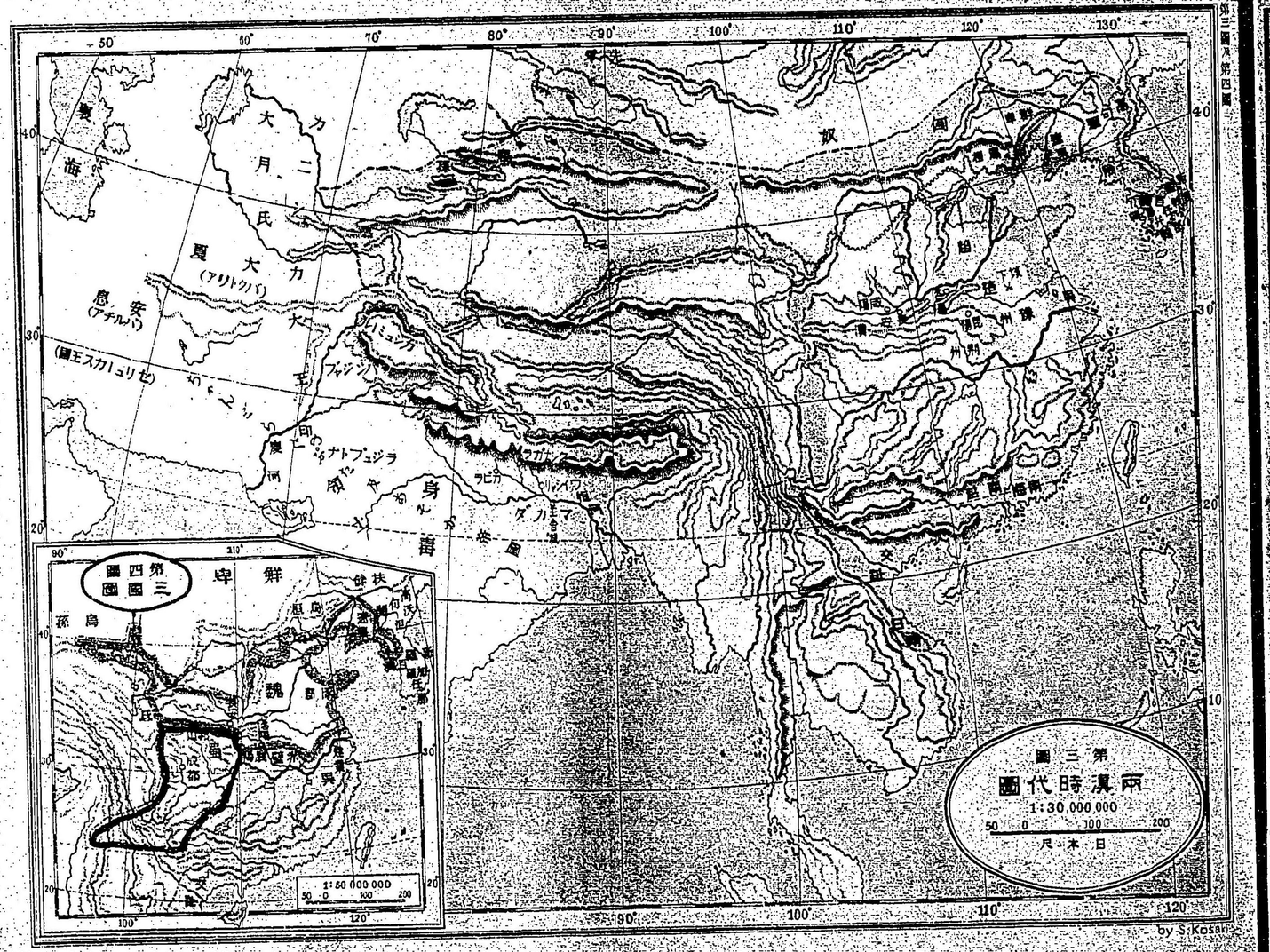
項劉二氏の戰

第四節　項羽已に河北を平げ、また咸陽に入りて子嬰を殺し、彭城に都して西楚の覇王と稱し、劉邦を封じて漢王となせり、然れども兩雄相下ること能はず、劉邦は、蕭何、張良、陳平、韓信等の謀臣を用ゐて大に項羽を討てり。韓信連戰連勝の勢を以て諸州を定めければ、項羽は勢益蹙まり、垓下に敗れて、遂に自刎せり。是に於て天下遂に劉邦の有に歸せり、時に四五九年なり。

漢高の經營

第二章　漢室の確立

第一節　劉邦楚を平げ帝位に卽く、之を漢の高祖とす。初洛陽に都し、後長安に遷れり。帝周室の尾大掉はざると、秦室の孤立して忽滅びたるとを顧み、封建郡縣の二制を併用し、郡には郡守を置きて之を直轄し、國には功臣を封じて王侯に列せり、已にして異姓諸侯の勢漸強大を致すを憂ひ、事



に托して諸王を廢絶し、要地に同姓の諸王を封じて藩屏たらしめたり。

朝儀を定む

第二節　秦挾書を禁じてより禮儀全く亂れしかば、高祖は叔孫通の言を納れ、朝儀を定めしめ、大に民間の賢者を求めしかば、文物亦爰に起るに至れり。

漢高祖像

第三節　高祖歿して、惠帝立つ。呂太后政柄を握り、多く呂氏を封じて、遂に漢室を危くせしかば、陳平・周勃等呂太后の喪に乘じて漢軍を率ゐ悉く呂氏の一族を誅して文帝を立てたり。之を呂氏の亂といふ。

呂氏の亂

文景の治　七國の亂

第四節

文帝大に節儉を行ひ德政を施し民業をしゝよく其業に安ぜしめたり。然れども諸侯なほ漢の法に遵はざるものありしかば文帝は推恩の令を下して之を抑へたり。景帝の世罪に托して諸侯の地を削りしかば吳王楚王等相踵いで叛し所謂吳楚七國の亂となりぬ。景帝周亞父を將として之を平定し、諸王侯の政權を收めて凡て之を京師に留め、其封國には別に吏を遣はして之を治めしめたり。是に於て天下始めて安し。

武帝の興學

第五節

景帝歿して武帝立つ。丑二年、始めて年號を立てて建元といふ。帝文景富裕の後を承けて大に學術を奬勵し、大學を設け、古書を集めしかば董仲舒、孔安國、司馬遷の如き儒學文章の大家續々輩出せり。然れども帝又武を嗜み

頻に兵を諸方に加へたるを以て、遂に國家の貧弱を致せり。

第三章　漢と諸外國

第一節

武帝の南越平定

是より先高祖の朝南海郡叛して南越と稱し、後高祖に招諭せらしが、武帝の世に至り此地再び叛せしかば兵を遣はして悉く南方の諸夷を平定せり。

第二節

古朝鮮及び帝の征討

武帝また朝鮮を討てり。抑朝鮮上古の事甚詳ならず、周の武王の時殷の箕子が此地に封ぜられてより世々王險に都せしが、漢の初に當り衛滿國人を率ゐて王箕準を襲ひ、自王となれり。武帝の世衛滿の孫衛右渠漢の使者を殺しかば、武帝大軍を以て之を討ち、五五三年遂に衛氏を滅して四郡を置けり。當時朝鮮半島の南部には馬韓辰韓の三國あり。是を三韓といふ。是より以來漢と韓との交通漸繁く、從ひて三韓と交通し來れる我が西邊の民も漸次那に私貢するものあるに至れり。

第三節

匈奴征討

北方にありては秦末以來匈奴益驕大を致し、漢の高祖より歲幣を得るに至りて愈中國を侮りその領土も東は朝鮮より西は西藏に至りしかば武帝は匈奴と絕ち、衛青霍去病等を遣はして之を討たしむ。衛青因りて大漠を横ぎり匈奴を窮追して悉漠南の地を定めたり。

第四節

西域交通

帝また西域を服せんとし張騫を遣はして之を視察せしむ。騫辛酸を嘗め、大月安息身毒諸國を歷遊して之の事情を審にせしかば、武帝はこれによりて西域と交通を開くことを得たり。

武帝外征の結果

第五節

武帝はかく外に向て、武威を張りしと雖も、その多年兵を動かしたると、内、土工を起し封禪を事としたるとに因り、遂に財政の困難を來しゝかば、帝酷吏に任じて、官爵を賣り、民業の利を奪へり、是に於て、百姓大に困み、天下平ならず。

宣帝の西域服屬

第六節

然るに、武帝の後、昭帝立ち、霍光の輔佐により、民力を休養し、宣帝に至り、專、意を地方の政治に用ゐしかば四民安堵し、漢業中興せり。加之、帝武事を忽にせず、烏孫を援けて匈奴を夾擊し、又、匈奴の内訌に乘じて呼韓邪單于を内屬せしめぬ、此時、趙充國は先零を討ち、鄭吉は西域を服し、六一〇年頃には、漢威盛に西北に震ひ、西域三十六國皆漢に服屬したりといふ。

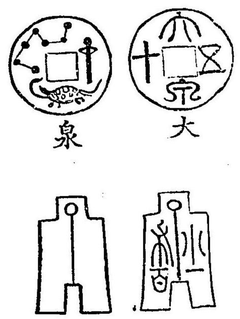
漢室衰へ王莽立つ

王莽の政

第四章　漢の末路

第一節

宣帝の後元帝立ち、大政を宦官に委せり。帝崩じ成帝位を嗣ぐに及び、外戚王鳳專、朝權を執り、漢業是に於て全く衰ふ。當時王莽賢才と交はりて頗、人心を收め、又、女を平帝に納れて威福を弄し、六六八年遂に帝位を奪ひ、自、新皇帝と稱せり。



王莽の貨幣

第二節

新皇帝位に卽きてより、井田の法を復し、貨幣を改造し、又制度を變更すること多く、且、匈奴と兵を交へて大に國威を損ぜしかば、天下漸、亂るゝ

劉氏王莽を平く

に至れり。

第三節　此時、景帝の後裔劉秀、兵を擧げ、劉玄を戴きて帝となし、新帝の軍を昆陽に破れり、劉玄の兵は亦進みて長安を陷れ帝莽を長安に殺せり。已にして劉玄殁せしかば、劉秀は鄧禹を用ゐ、又馮異、馬援等を納れ、六八五年、諸賊を降して洛陽に帝位に卽く、之を後漢の光武皇帝とす。

後漢初の內治

第五章　後漢と諸外國

第一節　光武帝民力を休養し、禮樂を修め、專、意を文治に傾け、復、兵馬を用うるを欲せず、惟、馬援をして安南の亂を治めしめしのみ、後、孝明、孝章二帝亦光武の遺業を受け、文運日に盛にして國力大に增進せり。

匈奴西域服屬

第二節　此頃匈奴は南北兩部に分れて互に相爭ひ、南部は遂に漢に內附せり、明帝、乃、諸將に命じて大に北匈奴を討たしめ、又班超を西域に遣はして西域諸國を招諭せしむ。章帝も亦班超に命じて大月氏を破り、遂に西域五十餘國を內屬せしめたり。和帝の世竇憲亦匈奴を破りて之を裏海の附近に走らしめたり、是に於て漢の威令遠く裏海に及び、匈奴は衰耗して鮮卑その故地に徙り來れり。

太秦との交通

第三節　班超已に大月氏と通じ、西域諸國の風土を探り、又太秦との交通をも開きしが、每に安息に妨げられて果さず。その後、漢、親を西域に失ふに及び、東西陸路の交通は全く絕えしも、海上の交通はなほ行はれ、八二六年頃には太秦の船舶日南に至り、漢の絹をもとめたりといふ。

佛教傳來

印度の古代

族制の害

釋迦

第六章　佛教の傳來

第一節　後漢の明帝が西域と交通を始めてより、佛教漸印度より渡來し、以て東洋文化の一原動力となれり。

第二節　是より先、紀元前一五〇〇年頃、アーリア人種印度の北部に移れり。國民は皆、波羅門教を奉じ、階級を僧族、王族、平民、奴隷、の四に別ち、嚴然たる族制を組織せり。

第三節　然るに年所を經るに從ひ、僧族大に跋扈し、下民はその壓抑に苦み、宗教上の益を受くること能はざりしかば、釋迦起りて之が改革を唱へたり。佛教即、是なり。

第四節　釋迦は紀元一〇〇年の頃、恒河の附近カピラ城に生る、實に孔老と時を同うす。父を淨飯王といひ、母を摩

アソカ佛教を弘む

釋加の像

耶といふ、夙に人生の無常を觀じ、王宮を逃れて加耶山に入り苦學して大に悟る所あり、後、中印度に出でて佛教を唱へ各地に布教すること四十九年にして、クシナガラに入滅せり。子弟マガダ國都、王舍城に會して三藏を結集し、後、ワイシャーリに會し、第二回の結集を爲し、以て教法を弘布せり。蓋、佛教は平等の主義を採り寂滅の理を說き、因果應報を論ぜしかば、僧族の屈辱を憤れるものは皆之を歡迎せり。

第五節　その後、印度の西北部はマセドニアの歷山大王に侵略せられしが、大王の歿後、チャンドラグプタ代りてそ

カニシカ王の結集

明帝佛教を求む

の地を領し、又、マガダ國を降せり、而してその孫アソカ、英明の資を以て大國を定め、深く佛教を信じ、經論を結集して、盛に佛教を印度及び近隣諸國に弘布せり。

第六節　七二〇年の頃、カニシカ、大月氏國に王たるに及び、亦深く佛教を信じ、カシミールに結集を行へり、然るに南印度の佛教徒は之に加はらず、依然としてアソカの結集に據れりしを以て、佛教は遂に南北二派に岐れたり。

第七節　後漢の明帝蔡愔をして大月氏に至り、佛經を求め、又僧侶を聘せしめ、七二七年洛陽に白馬寺を建て、佛經を翻譯せしめたり、支那に佛教あるは之より肇まる。

第七章　後漢の末路及び三國

外戚宦官

霊帝

後漢亡

三國鼎立

第一節　その後、後漢には幼主相繼いで出でしかば、外戚宦官各朝權を恣にし威福を弄し、清節の士を目して黨人となし之を獄に下せり、之を黨錮の獄といふ。靈帝立つに及び袁紹の兵によりて、僅に宦官を誅滅せしも、政權之より武人の手に落ち、漢業、復振はず、袁紹、孫堅、曹操等の、群雄天下に跳梁せり。

第二節　是より先、曹操諸賊を討ちて功あり、兵を擧げて獻帝を挾み、又袁紹等を滅して略、中原を定めたり。その子丕遂に帝の禪を受け、八八〇年、洛陽に帝と稱せり、之を魏の文帝とす。

第三節　是に於て、漢室の後裔劉備は關羽、張飛等の猛將を用ゐ、又謀臣諸葛亮を信任し、孫堅の子孫權と連合して

曹操の軍を赤壁に破り、遂に帝を成都に稱し、巴蜀を領せり。之を蜀漢の昭烈皇帝とす。次いで孫權江東を略し、建業に都して亦帝と稱す、之を吳の大帝とす。三國鼎立の勢、是に於てか成る。

諸葛亮の像

諸葛亮

第四節　諸葛亮、性忠誠にして用兵の術、治國の道に通ず。後皇帝を輔け出師の表を上りて魏を討ちしが、遂に魏の相司馬懿を降すこと能はずして病歿せり。

三國晉に幷せらる

第五節　是に於て、司馬懿の勢、中外を傾け、九二三年その子昭、蜀漢を滅し、昭の子炎、亦九二五年、元帝の位を奪ひ、九四〇年に至り、遂に吳を合せて天下を一統せり、之を晉の世祖武帝とす。

漢代儒學の進歩

文章

第八章　秦漢三國時代の文藝

第一節　秦經書を焚きてより、典籍一時世に絶えしが、漢の惠帝挾書の禁を解き、武帝亦古書を索め、大に文學を勸めしかば、儒學復、盛に起れり。加之、秦の蒙恬は毛筆を精製し、漢の蔡倫は紙を製し、楷行草の書體も行はれて文運の發達に利せしかば、漢の學藝は大に進歩せり。儒家には賈誼、董仲舒、孔安國、經義に明に、後漢の鄭衆、馬融、鄭玄、亦博學にして訓詁の學を大成せり。

第二節　文章亦漢代に進歩し、賈誼の論策、司馬遷の史記、皆雅正雄健を以て名あり、されど後に至りて漸、文飾を尚ぶに至り、後漢以後名文甚稀なりき。

異說

第三節

陰陽五行說は漢代に盛に行はれ、神仙も秦の始皇、漢の武帝に信奉せられてより益天下に流行し、漢末に至りては、道教と稱せらるるに至りぬ。

第三篇　晉及び南北朝

第一章　兩晉の治亂

第一節

晉の武帝、統一の業を遂げ、宋室を封じて帝室の藩屏となせしも、後地方の武備を撤して遊宴に耽りしかば、國政治まらず。惠帝の時に至り、賈后亦政を專にして放逸なり、趙王之を憤り、兵を擧げて賈后を弑し、帝を廢して自立せり。諸王之を見、兵を擧げて相殘滅し、所謂賈后八王の亂を致せり。而して當時の人士、率清談に耽りて虛無を說き放達

賈后八王の亂

尙び、敢て國難を顧みざりしかば、晉室傾きて、遂に外夷の侵略を受くるに至れり。

匈奴侵入東晉

第二節

是に於て、漢代にありて內屬せし匈奴は今や勢力を塞內に張り、單于劉淵は自漢帝と稱し、その子、聰繼いて立ち、石勒を將として、長安を攻め、九七六年、遂に晉帝を降せり。司馬懿の曾孫、睿、乃、位に建康に卽き、以て江南の地を保てり、之を東晉の元帝とす。

鮮卑

第三節

已にして、石勒亦漢を滅して後趙王と稱せしが、その歿後國內の亂れたるに及び、後漢以來北匈奴の故地に蟠居せる鮮卑族は漸、南下し、慕容氏は燕王と稱し、拓跋氏は代王と稱せり而して氐種の符氏亦之に乘じて秦王と稱せり。

泄水の戰

東晉滅ぶ魏起る

天下二分

第四節

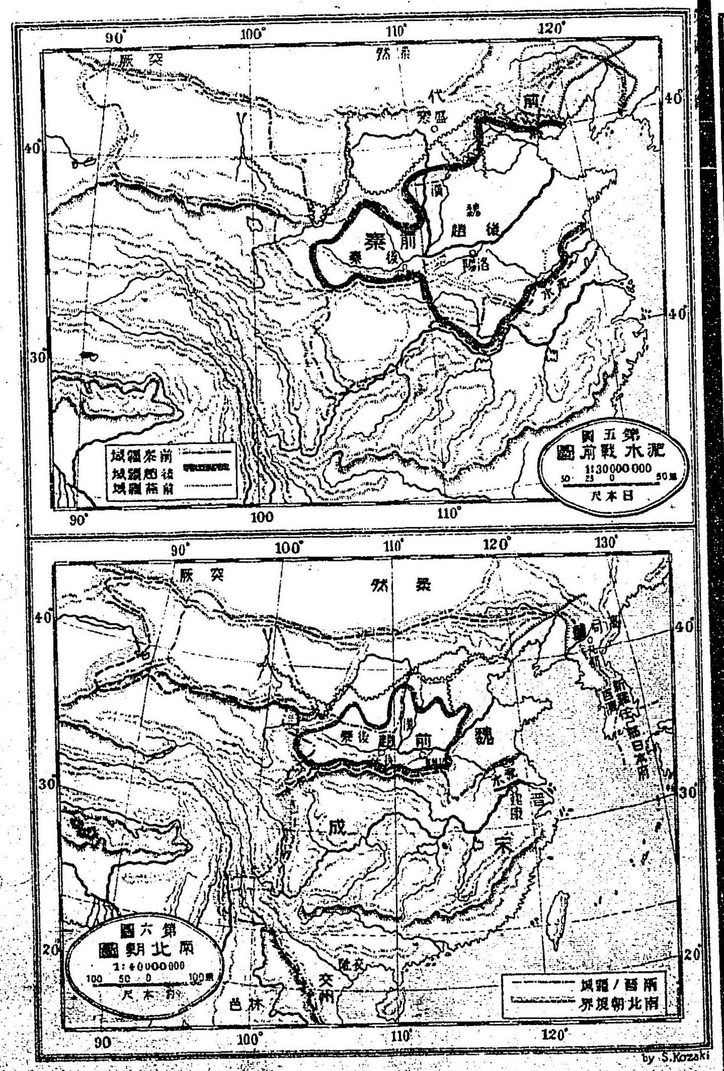
是に於て東晉の元帝、穆帝は、王導、桓溫等を用ゐて、連りに恢復を圖りしかど、遂に威を江北に振ふこと能はざりき。時に秦王符堅王猛を用ゐて國を富まし兵を强うし、燕を滅し、代を略し、殆、江北一帶の地を得、今や來りて晉を滅さんとせしかば、晉の將謝玄は之を泄水に防ぎ、一〇四三年、逆擊して大に秦の大軍を破れり。

第五節

然れども泄水の戰後、晉の勢漸衰へ、一〇八〇年、遂に宋の高祖劉裕の簒立を見るに至れり、秦も亦戰後その國勢頓に挫け、江北は再、群雄割據の地となりしが、後に至り拓跋珪盛樂に據りて自魏帝と稱し領地を東南に擴め、一〇五年、遂に江北を統一せり。

第六節

西晉の末より、北邊國を成すもの凡て十六、そ



の種族五あり、故を以て、之を稱して五胡十六國の亂といふ。斯の如く天下紛亂すること凡百三十有餘年、是に於て魏は北に蹯り、宋は南に據り、天下二分となれり、故に是より以後を南北朝の世と稱す。

第二章　南北朝の興亡及び突厥

南北朝の性質

第一節　此の時代は南北兩朝の間交戰相踵ぎ、各朝には亦叛亂簒奪連りに起り天下、殆寧日なかりき。

魏の改革

第二節　魏の太武帝江北を併せて、平城に都したりしが、孝文帝の世に至りて、洛陽に徙り、窄袖寬袴の胡服を廢して、寬袖の華風を用ゐ、漢人との結婚を勸め、又禮樂を改め學校を興し、鋭意改革を圖り文運を進めたり。然れども帝の改

兩朝興廢

柔然と突厥

革は自勇武の風を失ひて、奢侈文弱の俗を生じ、國勢爲めに衰へ遂に魏は岐れて東西となりぬ。

第三節　已にして東魏は北齊に傳へ、西魏は後周に奪はれ、後周は遂に亦北齊を併せたり。時に、南朝は建康に都し、宋齊、梁、陳、相傳へしが、後周の外戚楊堅、後周の禪を受け、一二四八年、陳を滅して天下を一統せり、之を隋の文帝とす。

第四節　是より先、魏の北に柔然あり、屢東西兩魏を困めて歲幣を徵し、その勢頗盛なりしが、一二一五年、その部族突厥種は兵を擧げて柔然を滅し、東は滿州より西はアラル海に至る地を占有し、東西に岐れて之を治めたり、是に至りて、東突厥は每に後周に寇し、西突厥は羅馬と結びて波斯を攻め、かくて突厥は北方の一大勢力となれり。

儒學

文詩

書

第三章　兩晉南北朝時代の文藝

第一節　兩晉の世、兵亂相踵ぎ、清談盛なりしかば、儒學自振ざりぎ、南北朝に至り、北朝は鄭玄の註疏により、盛に經學を究め、南朝は老莊を參酌し、詩賦を弄するもの多かりしかば、儒者は南朝に比すれば北朝に多しとす、經義も亦南北二派ありて、相對立せり。

第二節　文章は晉以後、益、華美を尙び、巧に形容對句を用ゐて、四六文を綴り、所謂六朝體を成せり、晉宋の間、詩賦の宗と稱せられしもの陶淵明、謝靈運等あり。

王羲之

第三節　當時佛敎も盛に行はれて、書畫彫刻建築、亦漸進步せり。東晉の王羲之は書に精

妙を極め、其名、最、著はれたり。

第四章　朝鮮と佛教の東漸

第一節　兩晉及び南北朝の代には、日韓及び支那の交通漸開け、佛教亦東漸し來れり。

第二節　漢末に當り、扶餘の人、朱蒙、鴨綠江の上流に高勾麗を建て、半島の北部を略し、其次子、溫祚、別に百濟を立て馬韓を併せたり。而して新羅の始祖赫居世また辰韓に興り、後、弁韓を降しぬ。世また之を三韓と稱す、後漢の金首露、加羅國を建てしが、垂仁天皇の朝、其國人來朝せしかば、國號を任那と賜ひき。

三韓

第三節　新羅は其位置我國に近く、我西陲の叛徒と通

日韓の交渉

せしかば、神功皇后親征して之を降したまひ、又、百濟をして朝貢せしめ給ひき。爾後我國は任那府を置き、常に之を保護せり。是れより三韓との交通常に絶えず。百濟王仇首は九四五年、王仁を遣はして、論語、千字文を上り、次で百般の諸工を獻じたり。

佛教の隆盛

第四節　當時佛教の情況を尋ぬるに、是より先きカニシカ王の時馬鳴大乘の法を闡き、龍樹は佛陀の妙法を說きて八宗の祖師と稱せられ、世親は漸之を世に布教せり。漢末以來梵僧多く支那に來りて、諸經を傳へ、西域の僧鳩摩羅什は後秦に來りて、佛典を譯せり、之を舊譯の佛經と稱す。僧道稠は魏にありて淨土論を譯し、達磨は梁に入りて禪學を說けり。後趙王石勒、秦王符堅、魏の文成帝及び梁の武帝皆、深く

佛教の東漸

佛教を信じたるを以て從て、寺院の建立、經論の飜譯等頗盛なり。

第五節　秦王符堅江北に雄飛せし時、高勾麗を降して胡僧、佛像、佛經等を傳へ、高勾麗之を信じてまた之を新羅に傳へたり。東晉の武帝亦佛教を百濟に布きしかば、佛教は漸、三韓に遍し、梁の武帝亦深く佛教を信し、一一八二年、司馬達等を遣はして之を我國に傳へ、一二一二年、百濟の聖明王、亦三寶を欽明天皇に奉れり、是より佛教漸我國に弘まれり。

日韓支三國の交渉

第六節　此の如く、三國の交通漸行はれ、我國は三韓を媒して支那の文化を求め、時に或は直接に工女を南朝に求めしことありしが、三韓の中高勾麗はその勢最强く、新羅は之と爭はんとして連りに百濟、任那を侵ししかば、我國は屢之を討ちて戒飾を加へたりしも、二二三年、任那は遂に新羅に併呑せられ、我國の威令遂に朝鮮半島に行はれざるに至れり。

第四篇　隋唐時代

第一章　隋の治亂及び唐の確立

文帝の治

第一節　隋の文帝已に天下を一統し、節儉を守りて專、意を民治に注ぎしが、性猜忌にして舊臣宗室を除きければ隋室孤立して形勢漸危し。

煬帝の大業暴政

第二節　文帝の第二子廣、文帝を弑して位に卽く、之を煬帝とす。推古天皇が小野妹子を遣はし、彼我の親交を修めたまひしは實に煬帝の二年なりき。帝大に宮殿を營み、運河

唐高祖隋を奪ふ

を開き、又長城を增築し、毎に數百萬の勞役を起せり。加之、帝、外征を事とし、南は林邑を平げ、臺灣を討ち、西は吐谷渾を破り、又、高勾麗の入朝せざるを怒り、大軍を發して三たび之を討ちしが、遂に克つこと能はずして止みぬ。

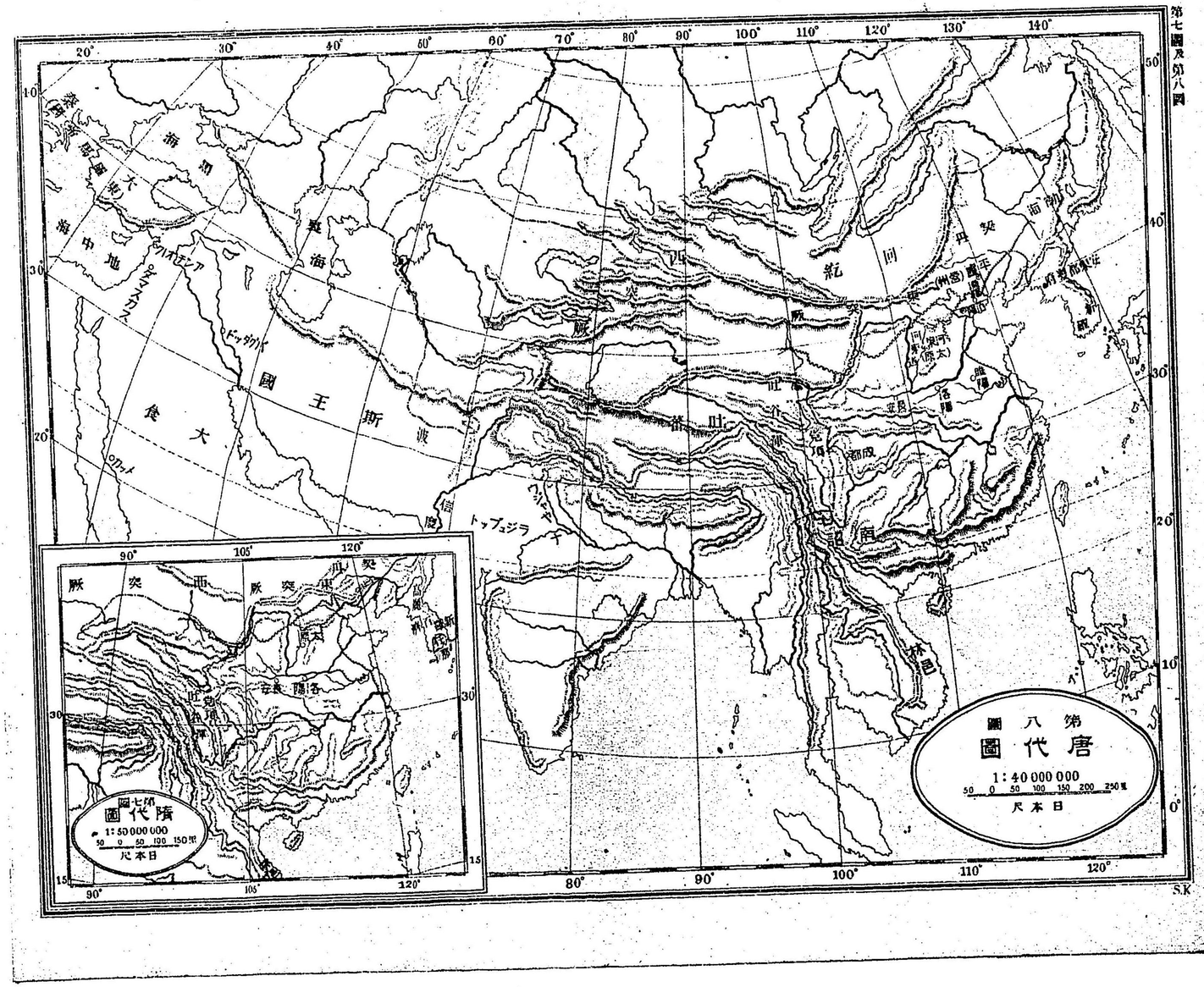
第三節

此の如く、土木に、外征に、人民の苦役甚しかりしかば、叛亂諸處に起り、東突厥、漸北邊を窺へり。太原の留守李淵、命を奉じて、突厥を防ぎしに戰敗れて罪あり。是に於て淵の次子世民、淵に勸めて兵を擧げしむ。淵乃、突厥の援を得て長安を拔き、恭帝を立て、一二七八年、遂に其禪を受けたり、之を唐の高祖とす。煬帝時に江都に遊びて弑に遇ひ、世民漸、各地の群雄を平げて天下を一統せり。

貞觀の治

第四節

高祖世民の功を嘉して天策上將とし、杜如晦



房玄齡、魏徵を信任して國事に參らしむ。高祖歿後世民立つ之を太宗とす。太宗冗費を省きて徭役を輕くし、學を興し業を勵まし、天下大平を謳歌せり。史に之を貞觀の治といふ。

唐の制度

唐太宗の像

第五節　貞觀の世、百物完備し

就中、其制度の如き、我朝の參酌して採れる所なり。唐には尚書省ありて長を尚書令といひ、六部の官司を總領し、大政を執行し、左右僕射之を輔く。尚書省の外には、中書省ありて詔勅を宣奉し、門下省ありて之を覆奏せり。其他、一臺、九寺、五監等の官廳ありて、各政務に服し、十六衛軍ありて內外を警衛せり。地方には府に牧尹あり、州に刺史あり、縣に令ありて各

其政を治め、道に巡察使を置きて之を監督せしむ。唐の田制、租庸調の法、の如き、又、法制、刑律の如き、亦我朝の參酌採用せし所なり。

第二章　唐と諸外國

日韓の交渉

第一節

太宗の後、高宗立つ、二帝の代屢、外國を征し、大に四隣を威服せり。時に、高勾麗は百濟と連合して新羅入唐の途を絶ちしかば、太宗は兵を出して高勾麗を討ち以て、新羅を援ひ、高宗亦兵を出して百濟を討てり。是に於て百濟の王族、福信、援を我國に求む。齊明天皇因て筑紫に幸し、阿曇比邏夫をして扶餘豐を百濟に擁立せしめたまひき。然るに唐將劉仁願、及び劉仁軌等、克く戰ひ、一三二三年、遂に百濟を滅し、ついで、李勣また高勾麗を滅し、安東都護府を置きぬ。新羅怖れて唐に臣事せり。

東西突厥衰亡

第二節

太宗は又、東突厥の紛亂に乘じ、李世勣を遣はして之を降し、更に兵を出して西突厥を討てり。高宗の朝に至り、西突厥遂に衰滅し、其地また唐及ひ回紇の領に歸せり。

西域交通印度

第三節

太宗は、又吐谷渾、及び吐蕃を討ちて、之と交を通ぜり。當時印度のウジャーナ國頗隆盛を極め、戒日王大に學術技藝を奬め、また佛教を興ししかば、學者高僧多く出でた り。太宗吐蕃に由て交を通ぜんとせしが、王の死に遇ひて和親を結ぶこと能はず、其後印度はラジュプット種族に隷屬し、溫都教起りて佛教漸衰へたり。

唐の威力

第四節

かくして唐の威令は遠く四方に及び、東は朝

景教の傳來　東西兩洋の交通

鮮より、西は中央亞細亞に至り、北はシベリアの中央部より南は安南に達せり。唐は邊陲の要地に都護府を置きて、之を統治せり。

第五節

唐の西に波斯國あり、先に大月氏を滅し、羅馬と戰ひ勢方に盛なり。太宗の朝、波斯の僧、阿羅本、經典を齎らして長安に至り、景教を傳へぬ。太宗爲めに波斯寺を建てたり。其後、太食、アラビアに起り、波斯を滅し、好を唐に通ぜしかば、爾來海陸東西の交通盛に行はれ、陸路は天山南北路により、海路は太食人を介して盛に太秦と貿易を營めり。

日本唐と交通を開く

第六節

我國亦舒明天皇の朝、犬上御田鍬を唐に遣はしたまひしより、盛に彼我の交通を開き、又僧侶學生を派遣して、制度文物を要むること多かりき。

武氏の禍

第三章　武韋の禍及び安史の亂

第一節

太宗の才人に武氏あり、高宗其容色を愛し、后王氏を廢して武氏を后とす、后、賢明にして政を攝し、帝の歿後、中宗を廢して、睿宗を立て、多く唐の宗室大臣を殺し、一三五〇年、遂に自立して曌と稱し、國號を周と改む。曌、明察人才を用ゐ、狄仁傑、張柬之等の名臣朝に列せり。張柬之、唐室を復せんとし、曌の病に乘じて、その寵臣を戮し、遂に中宗を擁立せり。

則天武后の像

韋氏の禍

第二節

然るに、中宗の后、韋氏、淫佚にして內行修らず、

遂に帝を毒殺するに至りしかば、睿宗の子、隆基、兵を擧げて后を殺し、諸韋を誅して、睿宗を重祚せしむ。睿宗歿して隆基立つ、之を玄宗とす、時に一三七三年なり。

開元の治

第三節　玄宗は、姚崇、宋璟の名相を擧げて專ら治を圖り、節約を守りて賦役を輕くしければ、天下太平にして百姓富み、學術工藝亦大に進みぬ。世之を開元の治といふ。

日唐の交

第四節　此頃吉備眞備、安倍仲麿、唐朝に留學し、仲麿は玄宗に仕へ、李伯等と交を通じ、遂に唐歿せり。唐朝の文學音樂此時また盛に我國に入り來れり。

楊貴妃安史の亂

第五節　玄宗、晩年、政治に倦み、佞相李林甫を用ゐ、楊太眞を寵して貴妃とせしかば、楊氏の一族要路に列し、紀綱大に弛めり。營州の安祿山、楊貴妃と結び、自三鎭の節度使を兼ね、一四一五年遂に、亂を起して洛陽を陷れ、燕帝と稱す。顏眞卿、顏杲卿等、義兵を擧げて賊を討ち、張巡、許遠兵を以て睢陽を死守し、郭子儀等亦連りに、燕軍を破りしと雖も、燕軍遂に長安を陷れぬ。玄宗蜀を成都に避け、位を肅宗に禪れり。是に於て將士楊貴妃等を殺して、肅宗を奉じ、郭子儀等は回紇の援を借りて、盛に恢復を計りしかば、賊勢漸衰へ安祿山及び其將史思明等各其子に殺されて、燕軍大に阻喪し、代宗の朝に至り、賊將李懷仙賊魁を殺して來り降り、一四二三年、唐の大亂全く平定せり。之を安史の亂といふ。

郭子儀回紇を討つ

第六節　郭子儀大亂を鎭め、又回紇を懷けて吐蕃を討ちたるを以て、威名盛に振ひ、厚く代宗、德宗の信任を受けたり。

藩鎮の專横

宦官と朋黨

第四章　唐の衰亡

第一節　安史の亂後、藩鎮の節度使は各文武の權を握りて地方に割據し、地方の貢賦を私し、又其職を世襲せり。德宗は百方之を抑制せんとして、事遂に成らず。憲宗英邁の資を以て位に卽き、よく賢相に任じ、武力を以て之に當りしかば、其專横少しく衰へしも、未だ全く其禍根を絶つこと能はざりき。

第二節　加之、唐は玄宗の朝以來、宦官、權勢を振ひ、或は將軍に拜せられて禁軍を指揮し、或は樞機に參して大權を左右し、遂に廢立を恣にするに至れり。之に反して、朝臣は皆俯伏して制を受け、又牛僧儒、李宗閔、李德裕等の如き朋黨を

唐の滅亡

立てゝ互に相陷れ、國政亂れて士民苦しみ、群賊起りて遂に長安に迫れり。

第三節　昭帝の時、相、崔胤、朱全忠によりて漸、宦官を殲滅せしに、朱全忠却て帝を洛陽に挾みて專横を極め、昭帝を弑して哀帝を立て、一五六七年、遂に禪を受けて帝位に卽けり、之を梁の太祖とす。

第五章　隋唐時代の文藝

儒學

第一節　隋天下を統一し、南北の學風を混和せしが、當時王通、最儒學を以て名あり。唐の世に至り文運益旺盛にして孔穎達、顏師古等相踵いで出で、又韓愈は孔孟を尙び、群聖系統を唱へ、大に釋老を排斥せり。

詩文

第二節　詩文も亦六朝の風を脱し、詩にば李白、杜甫、白樂天の詩仙、其妙域に達し、文には韓愈、柳宗元の文豪、雅健の筆を振ひて名あり。

書畫

第三節　美術には褚遂良顔眞卿能書を以て著しく、李思訓、王維、吳道玄は山水佛畫に精巧の名あり。

宗教佛教益東漸

褚遂良

景教流行の碑

第四節　佛教は唐に至りて益隆昌に赴き、太宗の朝、僧玄奘盛に經論を譯せり、之を新譯の佛經といふ。本邦の留學僧最澄、空海等德宗の朝、唐に在りて天台眞言の諸宗義を受け、高麗、新羅の諸僧、亦入唐して三論、華嚴を得て之を我國に傳へ、唐僧鑑眞亦我國に來りて律宗を傳へたり。

日唐の交通

其他道教、祆教、摩尼教、景教、亦頗行ばれたり。

第五節　我國玄宗、德宗の間唐との交通最繁く、百物皆唐に採りしも、仁明天皇の朝以來、交通久しく絶え、宇多天皇の朝菅原道眞の建議により、遣唐使の事廢せられ、唯商賈僧侶の私に來往するに止まれり。

第五篇　五代及び宋の時代

第一章　遼と五代及び宋との關係

五代の情況

第一節　梁以後道德亂れて忠義廢れ、國盛なれば祿位を保ち、國危ければ去りて强に就き、簒立を計るもの亦比々として絶えず。されば宋の起るまで五十三年の間は、帝位を踐むもの十三、國を易ふるもの五たびに及べり、史に之を五

契丹の勃興

代と稱す、梁、唐、晉、漢、周、即是なり。此際群雄の起るもの前後十二國、而して契丹北邊にありて最強し。

第二節　契丹はもと內蒙古の東部に住し、安史の亂後、耶律阿保機なるもの崛起して近隣を定め、一五七六年自皇帝と稱し、東、渤海を滅し、西、回紇を降して、支那の北部に雄飛せり。太宗の朝、石敬塘を援けて唐を滅し、河北十六州を得て晉帝と稱せしむ、已にして晉帝が臣禮を用ゐざるを怒り、之を滅して國號を遼と改め、大に四方を剽掠せしかば、忽、士民の反抗に遇ひて遂に北に還れり。

趙匡胤南方を合す

第三節　是に於て劉知遠太原に漢帝と稱す。遼因て漢を討つ。漢、郭威をして之を禦がしめしに、郭威功を恃み、漢に代りて周帝と稱す、已にして其將、趙匡胤將士に推されて帝

宋の太祖の內治

位に卽き、以て遼と爭へり、之を宋の太祖とす、時に一六二〇年なり。

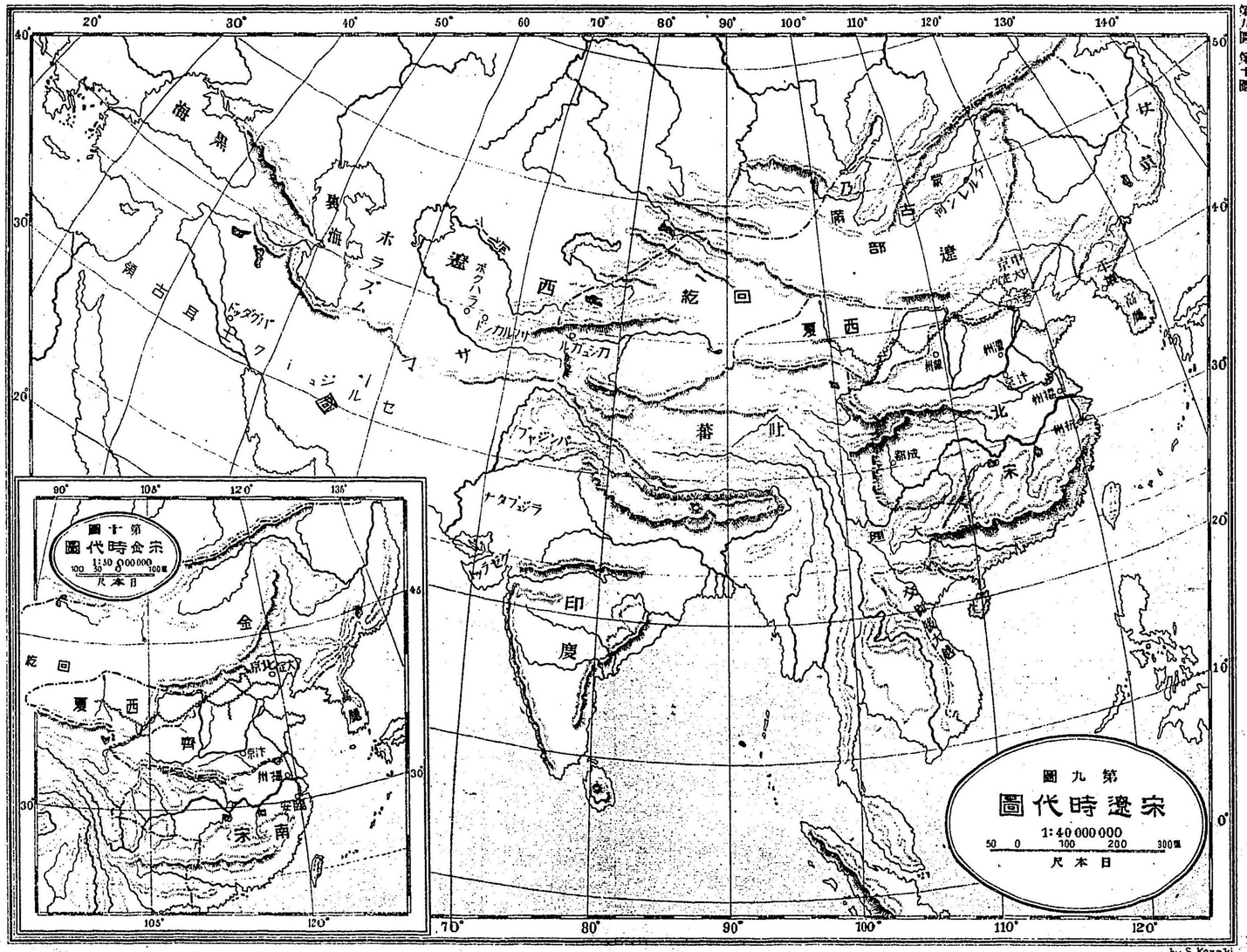
第四節　宋の太祖、趙普を信任し、文臣を以て節度使に任じ、又轉運使を置きて地方の財賦を掌らしめ、禁旅を增して交、邊境を守らしめしかば、藩鎭漸勢を失ひ、天下稍安し。太祖、乃、群雄を滅し、太宗の朝、一六三九年、遂に天下を一統するに至れり。

澶淵の盟

第五節　已にして遼の聖宗大擧して南下す。宋大に震駭し、都を遷さんと議するものあり。然れども眞宗は寇準の議を納れ、親征して澶洲に至り、一六六四年終に莫大の歲幣を遼に贈るを約して兵を解けり、之を澶淵の盟といふ。

高麗起る遼の全盛

第六節　是より先き、新羅國亂れて、高麗再び起り、一五



大夏

王安石新法

九六年、高麗の太祖朝鮮を一統せり。遼の聖宗は高麗の宋と通ずるを怒り、兵を出して之を滅せり、是に於て遼の所領は東、日本海より、西、天山に至り、又吐蕃を降し、北狄西域六十餘國を服し、實に全盛を極めたり。

第二章　宋遼夏金の爭

第一節

時に西夏の李元昊、回紇を破りて大夏皇帝と稱せり、宋の仁宗因て韓琦、范仲淹等をして之を討たしめしに、遼は其虛に乘じて南下せんとせしかば、仁宗は歲幣を遼、夏に贈りて和を結べり。

第二節

神宗此屈辱を憤り、一七二九年、王安石を擧げて青苗、保甲、均輸等の新法を施き、財を蓄へ兵を備へ、大に恢

復を圖りしと雖も、戰は敗れ、民は疲れて徒に百姓の怨嗟を招くのみ。

熙豐元祐黨爭

第三節　神宗の後、哲宗立つ、宣仁太皇太后政を攝し、王安石等の熙豐黨を黜け、司馬光等の元祐黨を用ゐ、悉く新法を廢せしかば、人民、大に喜び、女君の堯舜と尊稱せり。然るに司馬光の歿後、元祐黨中互に隙を生じ程頤、蘇軾等の名臣、黨與を結びて相容れざりしかば、遂に熙豐黨に乘ぜられぬ。

司馬光の像

金の勃興

第四節　時に遼の東に、女眞あり、部長阿骨打、四隣諸部落を降し、又遼軍を破り、一七七五年、遂に國を金と號し、自皇

遼の滅亡

帝と稱せり、之を金の太祖とす。

第五節　宋の童貫は遼の國運稍傾くを見、使を金に遣して遼を夾擊せんことを約し、兵を出して北進せしが、戰利あらずして退けり。然るに、金は易く遼の中京、燕京を陷れて遼帝を走らせしかば、宋の徽宗は此燕京を得て從來遼に贈りし歳幣を以て金に輸すべきを約せり。遼帝逃れて西夏に走り、ついで宋に走らんとし、一七八五年、遂に金人に囚はれ遼亡びぬ。遼の王族、耶律大石、後、サマルカンドに西遼を建てしが、幾くもなくして內滿及びホラズムに滅されたり。

靖康の難

第六節　金の太宗已に宋の微弱を見、ここに、大軍を發して汴京に迫れり。徽宗支ふること能はず、位を欽宗に讓りて和を金に要めしに、金なほ聽かざりしかば、上皇乃李綱を將とし、盛に恢復を圖れり。然れども、汴京愈危急に迫りたるを以て、上皇遂に金帛を贈り、三鎭を割き、質を出して金と和を結べり。已にして和亦破れ、金將斡離不は汴京を陷れ、徽宗、欽宗を執へ、張邦昌を立てて帝とし、一七八七年兵を北に還せり、之を靖康の難といふ。

第三章　南宋と金との爭

宋室の南渡

第一節　靖康の難後、張邦昌は高宗を迎へて之を立つ。高宗怯懦不明にして敵を避くるを計り、楊州より臨安に移れり、之を宋室の南渡といひ、是より後を南宋と稱す。

秦檜李綱の和戰說

第二節　金の太宗之を聞き、大兵を率ゐて南侵せり。宋將、韓世忠、岳飛等よく金軍を江北に禦ぎ、李綱、胡詮また復讐

韓侂胄の失政

を圖りしかば、金軍容易く意を逞うすること能ざりき、然るに秦檜の相となるに及び、和議を唱へて岳飛を殺し、又、歳幣を增し封冊を受けて、僅に徽宗の梓宮を迎へたるのみ。

朱熹の像

第三節

高宗の後、孝宗立ち、鋭意恢復を計り僅に金の世宗をして叔姪の禮を用うるを諾せしめしが、寧宗の朝に至り、韓侂胄擁立の功を恃みて專横を極め、朱熹等の學を目して僞學とし其徒を稱して黨人と爲し、皆之を黜く。加之、金が內訌外患に苦しみ國政亂るるに及び、大擧して之を討ち、大に邊功を擧げんとせしが、戰皆敗れたり、是に於て宋は大に驚駭し、韓侂胄の首を函送して和を乞へり。是より宋金共に振はず、遂に蒙古をして、その虛に乘ぜしむるに至れり。

印書儒學

第四章　五代及び宋時代の文藝

第一節

五代の世、印書の術始めて行はれてより、書籍、漸、民間に普及し、宋の太祖、太宗は又、文學を奬勵して、唐末の衰頽を挽回せり。加之、道釋の敎、盛に流布するに及び、漢唐の訓詁學は之に敵すること能はざるを以て、宋の代大に道佛を參酌して、周敦頤、程顥、張載等の碩學、仁宗の朝に

歐陽修の像

所謂道學を興せり。南宋の朱熹亦正心誠意格物致知の要を說きて、大に二程の說を擴めしかば、程朱學爰に起れり。朱熹と同時に陸九淵あり、別に一家の說を立てゝ其名頗著る。

詩文

第二節　詩文

詩文には、曾鞏、蘇恂、蘇軾、蘇轍、王安石、歐陽修等の諸大家相踵いて出づ。世、韓愈、柳宗元を合せて唐宋の八家と稱す。當時司馬光の資治通鑑、馬貴與の文獻通考は最有益著明の著書なりとす。

東坡像

書畫

第三節　書畫

宋の朝、亦書畫の名家多く、李公麟及び徽宗帝は畫に巧に、太宗帝、蔡襄、蘇軾、米芾は亦書を以て名あり。

佛教及び日支の交通

第四節

宋の代は佛教盛に行はれ、就中、禪宗最盛なり。當時我國は高麗、遼、金及び宋等と互に交通貿易し、宋室南渡の後は平清盛兵庫港を修め、大に日宋の通商を畫せり。從ひて僧侶の遊學するもの亦常に絶えず、僧榮西は茶を宋より傳へ、宋僧道隆は來りて建長寺を建てたり。北條の代、禪學の流行したるは蓋之が爲なり。

第六篇　蒙古種の隆盛

第一章　蒙古の西征及び金の滅亡

蒙古成吉思汗起り西夏を服す

第一節

蒙古はもとオノン河上に遊牧せる種族にして、久しく遼、金に貢を納めしが、鐵木眞出づるに及び、近傍諸蠻を征服し、一八六六年遂にオノン河上に卽位し、成吉思汗

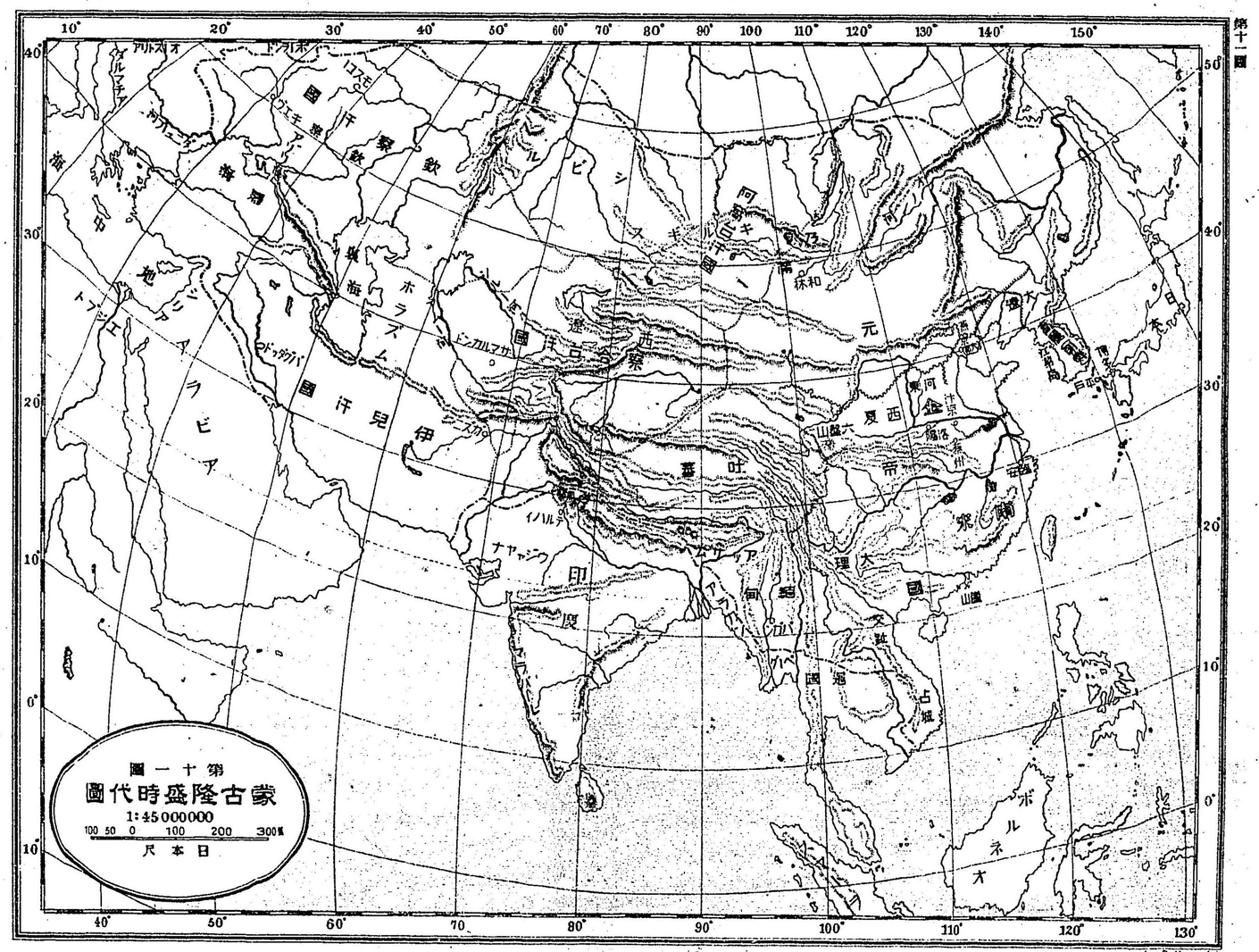
ホラズム討滅

金亡ぶ

と號せり。成吉思汗兵を西して西夏を降し、其子察合台、窩濶台と共に金を討ちて其燕京を陷れたり。是に於て金威復振はず。

第二節　成吉思汗、乃西征を畫し乃滿を滅し、ホラズムを討ちて、サマルカンドを屠り更に哲伯、速不台等を遣はしてこれを滅し、欽察部を平定せしめ、八剌をしてホラズムの遺族を追ひて印度を侵略せしめたりき。

第三節　一八八七年成吉思汗歿す、之を太祖とす。子太宗窩濶台立ち、太祖の遺志を紹ぎて金を討ち、使を宋に遣はして金を夾擊せんことを議し、事成らば河南を以て宋に讓らんことを約せり。宋の理宗、乃孟珙をして北征せしめ、一八九四年、金の蔡州城を陷れて之を滅し、勢に乘じて汴京、洛陽



太宗の高麗及び歐州征討

憲宗の西南經營

忽必烈と賈似道

を略せしが、蒙古軍の反抗に遇ひて師を旋せり。

第四節　太宗已に金を滅し、兵を遣はして高麗を降し、又、拔都、蒙哥等をして西方を經略せしむ。拔都往て欽察部を平定し、又モスコーを陷れ、進んで獨逸の東南に侵入せしが、太宗の訃を聞きて凱旋し、こゝに欽察汗國を建てたり。

第五節　かく蒙古の勢、西方に振ふに及び、憲宗更に南部に威を張らんとし、皇弟忽必烈をして大理を降し、吐蕃を討ち、又、交趾をして遂に朝貢せしめぬ。帝また更に皇弟旭烈兀をしてホラズムの地を平定し、バグダッドの教主を降し、又、シリアの地を平定せしめたり。

第六節　かく元威益振ふに及び、憲宗また忽必烈を將として大に宋を討つ。宋の理宗、賈似道を將として之を防が

しめしに、賈似道、戰を欲せず、私に歲幣を約して和を忽必烈に要めたり。會、憲宗歿し阿里不哥大汗たらんとす、忽必烈之を聞き、和を許して北歸せり。賈似道は之を機とし、夏貴をして忽必烈を尾擊せしめ、以て戰勝を裝ひ、又、媾和の事を秘して帝、度宗を眩まし、多く將相を殺して遂に宋の國運を危からしめたり。

元宋を滅す

第二章　元の一統及び交通

第一節

忽必烈、阿里不哥を降して位に卽き、都を燕京に徙して、國を元と號す、之を世祖とす。世祖宋を怒り、伯顏等を將として、臨安に迫りしが、宋は和議を主として防禦を忽にせしかば、遂に元軍に當る能はず、恭帝遂に之に降れり。是

元日本を討つ

文天祥の圖

に於て陸秀夫、張世傑、文天祥等宋の遺孽を奉じて、一意恢復を圖りしと雖、元將阿剌罕に破られて勢復た振はず、文天祥遂に執へられ、陸秀夫は海に投じ、張世傑は安南に逃れんとし、颶風に遇ひて溺死し、一九三九年、宋全く滅びぬ。

第二節

世祖又、高麗の叛亂を平げ、高麗を介して我國を招致せんとす。然るに北條時宗その使臣を斬りて敢て應ぜざりしかば、世祖大に怒り、一九三四年、忻都を將とし、壹岐、對馬を攻めしめしが、寸毫の功なくして徒に歸れり。世祖、宋を滅すに及び、阿剌罕、范文虎を將とし大軍を發して一九四

元南方を招降す

忽必烈の像

一年再、我九州を侵しゝが、戰また利なく、兵船颶風に遇ひて概、皆覆れり。世祖之を憤り後、再擧を企てしも、南方經略の爲めに果ざゞりき。

第三節　世祖又兵を遣はして緬甸を討ち、一九四三年、バカンを陷れて、悉、アッサム、邏國を招降し、更に兵を出して占城、交趾を討ち、苦戰の後遂に之をして朝貢を納めしむ。スマトラ、ジャワ亦次で朝貢するに至れり。

蒙古

第四節　是に於て、全亞細亞洲中唯北方シベリア、印度、アラビア、及び小亞細亞を除くの外、蒙古の威令至り及ばざる所なく南は南洋の數島を包み、西は歐羅巴大陸に跨り、實に未曾有の大帝國となれり。

東西の交通

第五節　されば、當時、東西兩洋間にありし、幾多の小國は皆滅びて、悉、蒙古の政令を奉ずるに至り、交通往復頓に頻繁を加へ、或は天山南北路を通じ、或は印度洋を越えて、商賈の來往常に相踵げり。一九〇五年の如きは、羅馬法王イノセント四世、使節を燕京に派し、又、以太利人マルコポロは來りて元の朝廷に仕へ、互に東西の文化を交換せりといふ。

マルコポロの像

第三章　諸汗國の情況並に明の勃興

蒙古の四汗國

海都の叛亂

元朝衰亡の因

第一節

蒙古は西亞細亞地方を並呑するに際し、ここに四汗國を立てたり。一を窩濶台汗國といひ、アルタイ山附近を領し、二を察合台汗國といひ、シール河邊を有す。三を欽察汗國と稱し、黑海以北を統べ、四を伊兒汗國と稱し、アムー河西を領有せり。

第二節

憲宗大汗となりて以來、此等の汗國は大汗の命を用ゐずして互に相攻伐せり。世祖太汗となるに及び、窩濶台汗海都は察合台汗、欽察汗と連合し、自大汗と稱して元と爭ふこと久しかりしが、成宗の朝、海都全く敗れ、武宗の朝、遂に元、及び察合台汗國に滅されたり。

第三節

かくの如く、元は連年兵を動かして國用給せず、紙幣を濫發して財政の紊亂を致し、加之喇嘛僧侶は元室の歸依を得て淨財を貪りしを以て、萬民皆戰役と暴歛とに苦みぬ、殊に漢人はその顯官に列し得ざるを憤り、又、元が宋室の墳墓を發けるを怨めり。然るに元室の繼嗣は常に會議によりて之を定め、繼承毎に宗室相鬩ぎければ、群賊之に乘じて蜂起し、遂に元室の衰微を致せり。

明太祖天下を定む

第四節

時に朱元璋といへるもの、兵を擧げて群雄を破り、徐達、常遇春をして、順宗を上都に走らせ、一〇二八年、遂に帝位に金陵に卽き、兵を遣はして蒙古、雲南の地方を平定せしめたり、之を明の太祖とす。

天下經營

第五節

太祖、乃、諸皇子を要地に封じて帝室の藩屏たらしめ、又、衞所を設け、指揮使を置き、戰時將帥を派して之を率ゐしめ、以て鎭兵の跋扈を防げり。帝また法制を定め、文敎

帖木兒

帖木兒と土耳古との爭

を興し、胡服辮髮を廢せしかば、紀綱大に張り、文物稍、整へり。

第六節　太祖即位の翌年、帖木兒、察合台汗國に起り、ホラズム人を率ゐて察合台汗國を并せ、又、伊兒汗國を滅し兵を西に派して欽察汗國の南部を略し、更に印度に入りて恒河の北部を領し、こゝに、强大なる汗國を立てたり。

帖木兒の像

第七節　此時オスマン土耳古、小亞細亞に帝國を立て、埃及と連合して、帖木兒を夾擊せんとせしかば、帖木兒急進して、帝バジャゼット二世を擒にせり。後帖木兒、明を討ちて大汗國を恢復せんとせしが、中道病歿してその望を遂げざりき。

靖難の役

永樂の治

永樂時代の外征

第四章　永樂の治及び土木の變

第一節　明の太祖歿して惠帝立つ。帝諸王の實力漸强大に過ぐるを憂ひ、事に托して諸王の領土を削りしかば、燕王棣は君側を清むると號し、兵を率ゐて惠帝を逐ひ、一〇六三年帝位を簒へり、之を成祖とす、史に此變を稱して靖難の役といふ。

第二節　成祖都を燕京に奠め、會通河を浚ひ、力を民庶の富裕と教化の普及とに致せり。是頃、我足利義滿、明と交通を開きて、永樂錢を輸入し、又彼工藝美術を採ること多かりき。

永樂錢

第三節　國內の政治稍整ふに及び、成祖

土木の變及び其結果

は海陸の兵を出して、安南を平げ、又海軍を派して柬埔寨、暹羅、マラッカ、ボルネオ、スマトラ、ジャワ等の南洋諸邦を朝貢せしむ。帝また兵を北に派して蒙古の餘類を討ち、韃靼部、及び瓦剌部を內屬せしめたり。

第四節　然るに其後瓦剌の也先は韃靼を幷呑して、明の北邊を侵ししかば、英宗は宦官王振の勸に從ひ、二一〇九年、土木に親征せしに、大敗して遂に虜となれり、之を土木の變といふ、後、明將于謙、景帝を擁立し、瓦剌を討ち、英宗を復せり。是に於て二帝相善からず、後、景帝の病篤きに乘じ、英宗は宦官、曹吉祥の力によりて重祚せり、是より宦官威福を弄し、曹吉祥、嚴嵩等、相ついで朝權を紊せり。

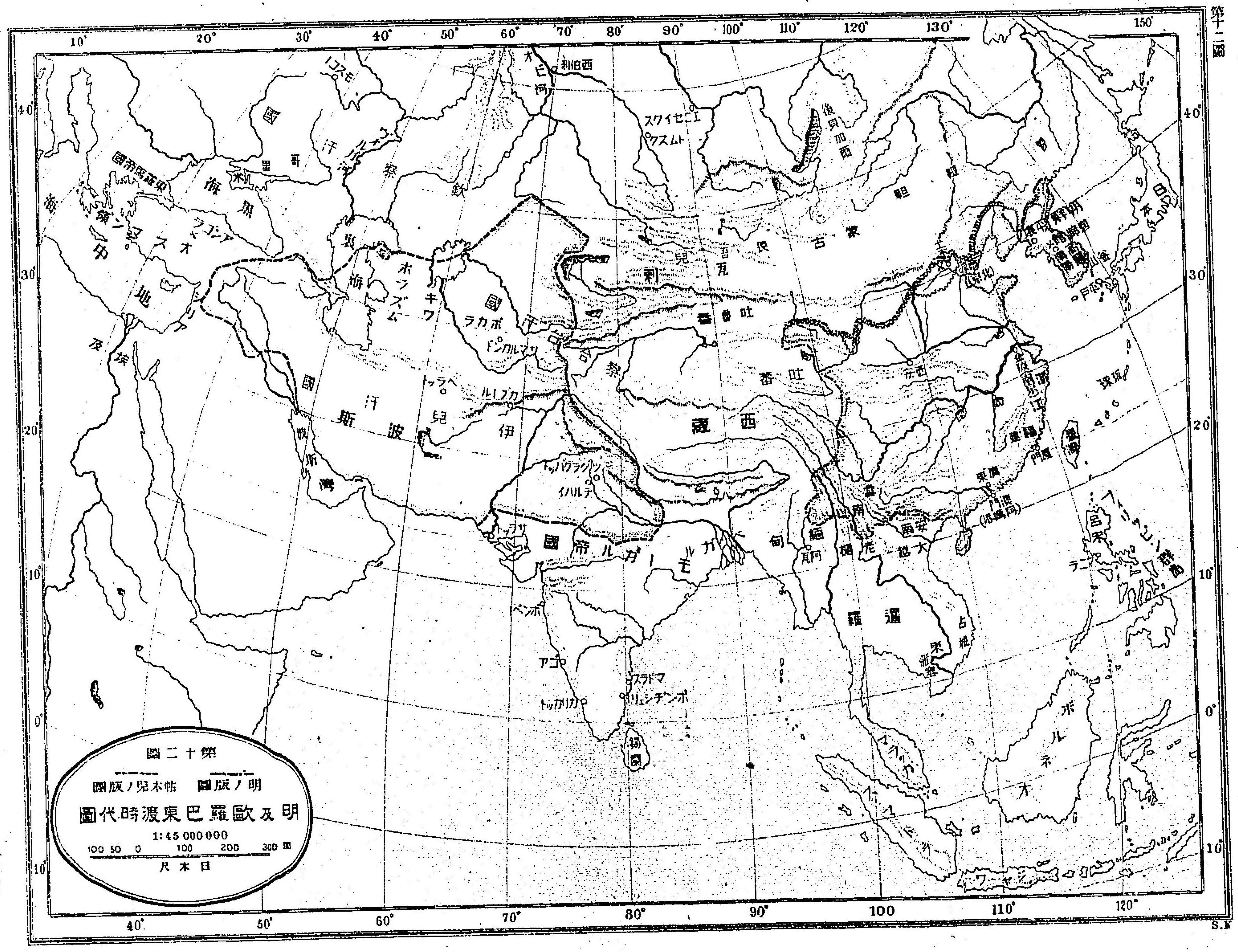
儒學

文字
詩文

第五章　元明時代の文藝

第一節　元代にては儒學甚盛ならざりしも、明の太祖に至り大に文運を進めたり、薛瑄、胡居仁等大に程朱學を發揮し、王守仁は佛老を研めて陽明學を興せり。是に於て學派分れて二となりぬ。宗教には當時喇嘛教最盛にして、佛教、道教、基督教も亦頗流布せり。

第二節　蒙古はもと文字を有せず、畏吾兒文字を用ゐて蒙古語を記ししが、世祖の朝、吐蕃の僧八思巴、蒙古文字を作りて詔勅を記し、翰林院に於て之を漢譯せり。されど詩文は一機軸を呈し、戲曲小說の類始めて此時代に起れり。西廂記、水滸傳、西遊記、金瓶梅は共に皆、元明時代の傑作と稱せらる、文章には宋濂、方孝孺等、明代に於て能文の稱ありき。



第三節　此時代には美術技藝亦大に進歩し、殊に文徵明、董其昌は能筆を以て見はれ、沈周、庚寅、等は花鳥の畫に精妙を得たりと稱せらる。

董其昌

歐人東渡の期

第七篇　歐羅巴人の交通時代

第一章　西亞細亞の形勢幷に歐羅巴人の東渡

第一節　明の形勢漸、多事ならんとせる時は、即、西亞細亞の形勢亦一變して、歐羅巴人東渡し、東洋の天地亦一新局面を開くの時なりき。

西亞細亞の情況

第二節　帖木兒の歿後、西亞細亞は頗紛亂を極めしが

帖木兒の玄孫、アブセイドは、一時天山の西を領せしも、直ちに土耳古に滅され、土耳古の漸衰運に趣くに及びては波斯、キワ、ボカラ等の諸汗國漸次その地に起れり。

モーガル帝國

第三節

アブセイドの孫バーベル、二一・八五年、印度に入りて、モーガル帝國を創立し、その孫アクバールの朝、領土漸南北に擴がり、二三一九年、オーランゲーブ立つに及び、全印度、率皆、その領土に歸し、印度は頗隆盛を致しき。

葡萄牙人の東渡

第四節

是より先き、二一五八年、葡萄牙人ワスコ・ダ・ガマ、喜望峯を逸りて印度に至りしより、葡萄牙人はゴアに商館を開き、錫蘭及び南洋を略し、明に來往して澳門を占領し、二二〇九年には我が西陲に貿易を開き、フランシス・ザ・井エールは我が國に來りて基督教を傳へ、マテオリッシは廣東よ

西班牙人の東渡

英吉利人佛蘭西人和蘭人

り燕京に布教して、大に神宗の信任を得たり。

第五節

西班牙も亦、マゼランが世界を一周して以來、呂宋を占領して之に據り、明の南岸に通商せり、一二四〇年には我が平戸に至り、大に德川家康の厚遇を受け、爾來大に東西の航通を開きぬ。

第六節

次で、英吉利人亦、一二六〇年印度に至り、モーガル帝の許可を得て、サラットに貿易を開き、後印度及び我が長崎に往復せり。同時に、和蘭人亦東方に航し、西班牙、葡萄牙の殖民地を略し、臺灣に據りて極東貿易の全權を握れり。我が寛永年中、德川氏が基督教を嚴禁し、外國貿易を停止せしも後も、和蘭人のみ依然我が國に入るを許されき。佛蘭西人も當時印度のポンディシェリーに至り、盛に英吉利人と競爭せり。

露西亞のシベリア拓殖

明の南北に於ける外寇

第七節

露西亞は、イワン三世欽察部を降して以來、盛にシベリア拓殖に從事し、一二二四年には使をシベリア諸汗に遣はして、明に通じ、諸處に城砦を築き、後貝加爾地方より蒙古の北邊を探り、又黑龍江地方を探檢せり。

第二章　明の外寇

第一節

歐羅巴人が東洋に交通を開ける頃は、明の外交頗多事の際なりき。當時、安南の豪族黎利は陳氏を滅し、又明及び老撾を攻め、國を大越と稱せしが、その後勢漸衰へ、一二〇〇年國內兩分し、南北共に明に臣事せり。之に反し韃靼の俺答は韃靼、瓦剌、西藏等を服し、大に明の北邊に寇せり。世宗は宦官の專橫に苦みて之を防ぐこと能はざりしが、俺答

朝鮮に於ける倭寇

明に於ける倭寇

喇嘛教を奉ずるに及び、復、明に入寇することなかりき。

第二節　高麗は久しく元の干渉に苦みしが、元の末に至り、恭愍王は僅にその束縛を免れたり。然るに、我西陲の諸豪族は南北朝の紛擾に際し、半商半賊となり、頻に朝鮮沿岸を標掠せり、之を倭寇といふ。恭愍王は之を我が邦に訴へ、或は之を防ぎしも、更に功を奏せず。李成桂僅に之を平げ、二〇五二年、功により、自立して明の封冊を受けたり、之を朝鮮の太祖とす。實に我が南北朝の合同と時を同うす。

第三節　明も太祖以來、倭寇に苦しみしが、成祖の朝、足利義滿隣交を修むるに及び、嚴く海賊を取締りしかば、爾來交通益盛なるに至れり。義敎に至りては勘合符によりて常に貿易を營ましめき。然るに、その後明の奸商我が商民を詐

豐臣氏征韓の役

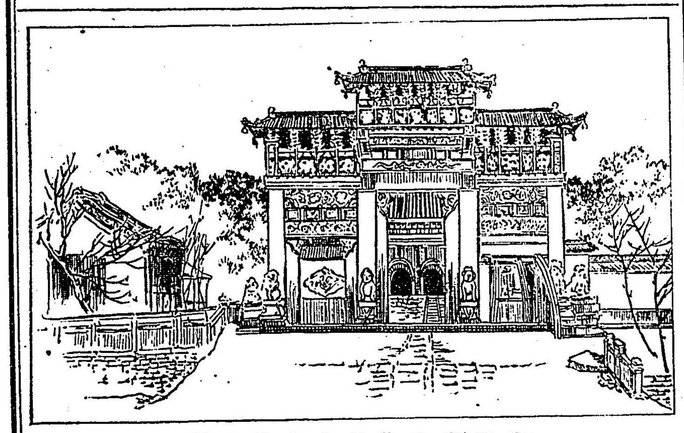
明末東林黨の爭

くに及び、倭寇再猖獗を逞うし、江の南北皆その害を蒙りぬ。その後二二二三年、爺大飢大に倭寇を破り、その鋭鋒を挫きしかど、その餘黨は猶、臺灣に據り、時々近海に出沒せり。

第四節　豐臣秀吉志を得るに及び、明の衰頽を侮り、之を席卷せんとし、途を朝鮮に借らんとせり。朝鮮王宣祖李昭之を聽かず、秀吉乃、諸將を遣はし、八道を蹂躪せり。明の神宗は宣祖の乞に應じ、之を援ひけるが、明軍利あらず祖承訓は平壤に大敗し、李如松は碧蹄館に敗れたり、神宗恐怖し、二二五六年、沈惟敬をして、小西行長を介して、和を請はしめしに和遂に成らず、秀吉の軍再び來り侵し、交戰歲餘に及びしが、秀吉歿して後、事漸熄みぬ。

第五節　此時、明には、王錫爵、相となりて專横なり、顧憲

滿洲の勃興



奉天府に於ける太祖の廟

成等之を憤りて卿里に歸り、東林書院を開きて書を講し朝政を非議せしかば、朝野志を得ざるもの相呼應し、東林黨の名海内に轟きぬ。是に於て朝臣東林黨互に相軋り、明室益衰へたり。

第三章　清國の確立

第一節　明末歐羅巴人の東渡

明末歐羅巴人の東渡に際し、東北に強國起れり、滿洲即是なり。滿洲の太

明室滅ぶ

鄭成功の忠義

祖を愛親覺羅努兒哈赤といひ、雄略あり、頻に近傍部落を幷呑し、一二七四年自皇帝を稱し、葉赫部を滅して、明軍を走らし、遂に奉天府に都せり。太祖の後、太宗嗣ぎ、兵を西に派して漠南蒙古を定め、一二九四年、國號を改めて大清と稱し、朝鮮を討ちて、その封册を受けしめたり。

第二節　明の國政亂れ、李自成等の流賊蜂起するに及び、清の世祖兵を率ゐて明を侵す。明の毅宗吳三桂をして之を禦がしめしに、李自成急進してその虛を襲ひければ、北京遂に陷りて、帝は自刎し、一三〇四年、明室爰に滅びぬ。明の遺孽舊臣、共に恢復を計りしも事遂に成らず。

第三節　吳三桂明室を救はんとして得ず、援を清に乞ひて讐を復せんとせしが、清軍已に河北を領し、李自成の流

三藩の亂及び臺灣鎮定

賊を滅し、復如何ともする能はず、鄭成功は魯王を奉じて一時南京を復せしかど、戰亦敗れて臺灣に退き、和蘭人を放逐して僅に之に據り、更に援を我が國に要めしが、當時我が國鎖國主義を採りて、之に應ぜざりしかば、遂に志を達せずして歿せり。

第四節

二三二一年、聖祖康熙帝立つ、此時平西王吳三桂、平南王尚之信、靖南王耿精忠、地方の兵食を領し、帝の忌憚せるを慮りて叛す、天下の辯髮を欲せざるもの翕然として之に應じ、鄭成功の子、經亦臺灣にありて之を援けしかば、江南の地概賊の有に歸せり。聖祖之を

清聖祖の像

尼布楚條約

討つこと九年に及び僅かに叛徒を平げ亦臺灣をも定むることを得たり。

第五節

聖祖、露西亞人が雅克薩、尼布楚に來住するを怒り、彭春をして雅克薩城を攻め、又和蘭人を介して書を露西亞帝ピーター一世に贈り、二三四九年、尼布楚條約により北邊の境界を定めたり。

清の西部平定

第六節

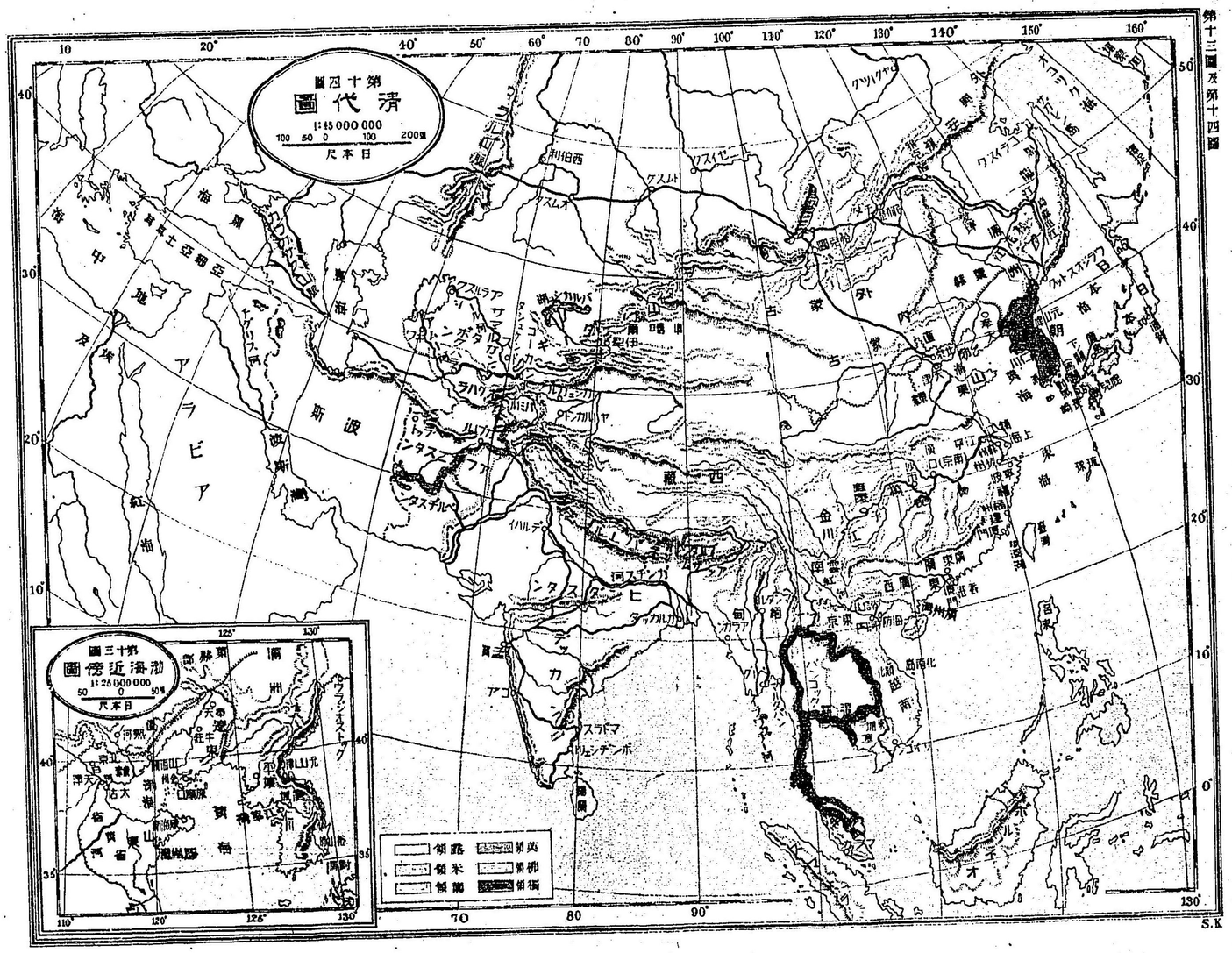
帝又漠西に兵を出し、準噶爾を征して、アルタイ山東を幷せ、外蒙古を略し、又西藏を討ちしが、世宗の朝に至り、西藏全部を平定せり。

高宗の中央亞細亞經略

第四章　高宗の外征

第一節

世宗の後、高宗乾隆帝立ち、班定を將として準



第十三圖及第十四圖

嘓爾を討ち、悉く天山南北路を平定し、又カシュガル、ヤールカンドを降し、更に兵を出して、金川諸部を平定せり。

遅羅緬甸の盛衰服屬

第二節

是より先き。宋の末、遅羅は日本人山田長政を用ゐて隣國を討ち、勢一時盛なりしが、基督教の侵入するに及び、國人佛蘭西人を疑ひて内亂を起せり。緬甸人は遅羅の内亂に乘じて獨立し、遂に遅羅を滅して、清の雲南に迫りしかば、高宗之を伐ちて歳貢を徵せり。此時漢人鄭昭といふもの安南、柬埔寨の援を得て遅羅を復し、都をバンコックに奠めしに、内亂復忽ち起れり、ファヤチャクリ之を平げ、二四四二年自遅羅王と稱し、清に通じて高宗の封册を受けたり、今の遅羅王家、即、是なり。

安南和親す

第三節

安南は曩に南北に岐れて、頗紛亂を極めしが、

二四四六年、阮文惠南北を併呑するに及び、高宗は黎氏を憐み、兵を以て阮氏を討ちしも、戰遂に克たず、然れども、王阮文惠は清の再擧を怖れ、後、罪を謝して和を乞へり。

第五章　康熙乾隆時代の制度文物

文物大進

第一節　聖祖、世宗、高宗、の世、清の威令遠く四方に振ひ、當代の文物頗、隆盛を致せり。

官制

第二節　清內閣に大學士、協辨大學士を置きて、樞機を整理し六部を總べしめ、都察院を置きて百官を糾彈せしめ、又通政司ありて內外章奏の通達を掌れり。世宗の朝軍機處を設け、大學士、六部尚書より、軍機大臣を擇び、以て、軍國の大事を處決せしめ、又、理藩院を設け、蒙古、伊犁、西藏、の政令を掌

軍備

らしめたり。又、近時に至り更に總理各國事務衙門及び海軍衙門を置けり。又地方には總督を置きて數省の政務を統べ、巡撫をして一省の事務を掌らしむ。而して京官の要路には滿州人、漢人、各同數を任用せり。

第三節　軍制は八旗、綠旗、を置き、八旗には滿州八旗、蒙古八旗、漢軍八旗等ありて、都統之を總ぶ、綠旗は漢人より成り、提督之を統ぶ。其他蒙古には旗兵あり、西藏には番兵あり、支那本部には勇兵あり、海軍には又北洋、南洋、福建、廣東、の四水師あり。

清朝の考證學

第四節　教育の制亦大に備はり、學者多く出でたり。清の顧炎武、考證學を起してより佩文韻府、康熙字典、四庫全書、等の諸書出で、朱彝尊、毛奇齡等の碩學亦輩出せり。

詩文著作

第五節　詩文亦大に進み、高宗、王士禎等最名あり。歴史地理には御批通鑑輯覽、明史、大清一統志、十八省通志等有益著名の書多し。

第六章　露西亞と英吉利との東略及び鴉片戰爭

印度に於ける英佛の爭

第一節　乾隆帝が外征を事とし、後印度の形勢漸、革まれる時は、恰も英吉利、佛蘭西兩國人が、印度に於て最激烈なる競爭を試みたるの時なり。英吉利人クライヴ、幷にヘスチングスは、大に佛蘭西の軍を破りて、ヒンダスタン、デッカン、等を定め、モーガル皇帝を擁して、盛に印度經營に從事し更に緬甸と紛議を生じて之と戰ひ、其領アラカン、及びアッサムの

安南に於ける佛國

地を得たり。

第二節　佛蘭西は印度に失敗してより、益意を安南に注ぎ、廣南王の遺孽福映を援けて、阮文惠を討ち、一四六三年、安南を統一せしめ、因て貿易布教の利を獨占せり。

中央亞細亞に於ける英露

第三節　此際、露西亞は連りに中央亞細亞を經略し、波斯を討ちて裏海の西岸を得、ターキスタンを奪へり、英吉利は露西亞の南進を以て印度を危くするものとし、アフガニスタン王と結びて之を防ぎしが、戰敗れて退きぬ。

露西亞の北清交通

第四節　露西亞は尼布楚條約により、東方經略に失敗せしが、清の世宗の朝、清に請ひて、恰克圖に條約を結び、因て北清の貿易を開き、漸、東方經略の歩武を進めたり。

白蓮教徒の亂

第五節　仁宗嘉慶帝位に即くや、白蓮教徒清國に蜂起し、民間官吏の横暴を怒れるもの、私鑄の禁を憤れるもの、軍役を厭ふもの、皆之に應じ、剿、粤賊邊境を刼ししかば、清國大に騷擾せり。朝廷僅に之を平ぐるも國運衰へて、内外漸、多事に赴けり。

鴉片の役南京條約

第六節　仁宗の後、宣宗道光帝立つ、當時英吉利人は印度を本據とし、盛に鴉片を清國に輸入せしかば、兩廣の總督林則徐は嚴命を傳へ、外人所藏の鴉片を燒き、其輸入を禁止せり。されば、英吉利は軍艦を發して、互市の禁を解かんことを迫り、舟山嶋を占領し、その將エリオットは直ちに渤海灣を衝けり。清國和を結ばんとして諸はず、英吉利は更に廣東、寧波等を陷れ、進んで、南京に迫れり。清廷大に怖れ、一二五〇年、者英を南京に遣はし、香港を以て英吉利に割讓し、又上海、寧

波、福州、厦門、廣東、の五港を開き、償金を約して局を結べり。

第七章　長髮賊の亂及び英吉利佛蘭西との葛藤

第一節

長髮賊起る

鴉片の役は實に清廷の微弱を發表せるものなり。廣西の人、洪秀全、之を見、基督教を以て愚民を惑はし、一二五〇九年、兵を起して國を大平天國と號す、その徒皆髮を長うしたるを以て之を長髮賊といふ。文宗咸豐帝、之を伐ちて勝たず、曾國藩、李鴻章等の義士を募りて、之が征討に從事せり。

李鴻章の像

第二節

英佛との戰　天津條約

此時に際し、清國官吏は商船アルロー號が、英吉利の國旗を飜へし、清國人を使役して、廣東に至れるを見、清國人十二名を逮捕せしかば、英吉利大にその不當を鳴らせり。會佛蘭西の宣教師、廣西に於て殺されしかば、英吉利は佛蘭西を誘ひ、同盟して、廣東を陷れぬ。清國内外の禍患に苦み、一二五一八年、遂に天津に於て和を結べり。

第三節

英佛北京を陷る

かくて英吉利、佛蘭西兩國の使臣、條約書を交換せんとて白河に入り來りしに、白河砲臺は突然之を砲擊しければ、兩國其不法を怒り、同盟艦隊を發して、白河を陷れ、又、太沽、天津、北京を降せり、咸豐帝熱河に走り、恭親王をして和を請はしめぬ。

第四節

北京條約　露西亞の侵略

露西亞は清國の内亂に乘じ、ニコライスクに

城き、清國に迫りて境界改正を要め、愛琿條約(一八五八)により黑龍江を以て國境とし、烏蘇里江の右岸を共有地とし、且松花江及び烏蘇里江の自由通航權を得たり。北京の談判困難なるに及び、露西亞公使は爲めに大に斡旋して二五二〇年、清廷をして償金を拂ひ、又、基督教の自由布教と、牛莊、漢口、臺灣等の開放とを承認せしめ、以て北京條約を完成せしめたり。その周旋の報酬として、露西亞は烏蘇里江東の地を受け、こゝにウラジオストックを建てたり。

第五節　かく、外患の頻りなるに際し、長髮賊は益猖獗を逞うして、其餘毒十六省に及べり。穆宗同治帝は外國との和成るに及びて、援を英吉利、合衆國、及び佛蘭西に乞ひ、新に洋鎗隊を編制して、曾國藩、李鴻章の兵と共に洪秀全を討て

英吉利の印度平定

露西亞の中央亞細亞經略

り、賊勢之によりて頓に衰へ、二五二四年、洪秀全毒を仰ぎて死し、餘黨亦皆下れり、されど、多年の戰亂により爾來清國復振ふ能はず。

第八章　英吉利露西亞佛蘭西の經略

第一節　英吉利佛蘭西兩國が清と爭へる際、印度人は英吉利人の政令を喜ばずして叛し、モーガル帝を戴けり。印度總督カンニングは漸、之を平定し、東印度商會の政權を收め、二五四七年、英吉利女王は印度女帝を兼ね、カルカッタに總督を派して之を管轄せしめたり。ついで英吉利は緬甸と軋轢を生じ、マンダレーを陷れ、遂に之を滅せり。

第二節　英吉利が南亞細亞を幷呑するの時、露西亞は

益中央亞細亞を經營し、漸次ボカラ、及びキワを保護國とし、又、コーカンドを略せり、後清國西部に回部の亂あるに乘じ、露西亞は兵を出して伊犁を占領せり。清の光緒帝、曾國藩を遣はして、露西亞と國境を定め、償金を拂ひて和を結べり。

佛蘭西南部交趾を保護國とす

第三節　佛蘭西は曩に越南の統一に盡力せしが、越南が約に背きて、化南島を讓らず、剩宣教師を虐待したるを怒り、二五一八年、遂にサイゴンを占領し、二五二二年、又南部交趾支那を領して漸、和を許し、翌年柬埔寨をも亦其保護國とせり。

佛蘭西越南を保護とす

第四節　然るに、越南は益佛蘭西人を惡みて之を殺し、しかば、佛蘭西は越南王に迫り、之をして基督教公布と紅河の航行權とを承認せしめ、更に貿易保護を名として、河内、海防、諸市に兵を駐在せしむ。越南王は清の賊將劉永福をして黑旗兵を以て佛蘭西軍を討たしめしが、二五四三年、戰遂に敗れ東京地方を讓りて其保護を受くるに至れり。

清佛事件

第五節　清國は越南が其正朔を奉ずるを名とし、其和議を認めざりしかば、佛蘭西はクールベーをして、海軍を率ゐて福建艦隊を粉碎せしめ、二五四五年に至り、清國をして東京地方占領を承認せしめたり。

メーコン河邊問題

第七節　佛蘭西は尙暹羅の地を侵略せんとして、メーコン河東を暹羅に要求せり、暹羅怖れて之を許す、英國は之を以て緬甸より雲南に至るの交通を害するものなりとし、佛蘭西と交渉し、境界委員を派出して、メーコン河の上流に中立地を選定せり。

第八篇　極東の近時

第一章　日本と朝鮮の開國

第一節

我が國は寛永以來鎖國を旨とし、久しく極東に安んぜしが、西洋諸國の東洋經略を創めて以來、露西亞は通商を求めて我が北邊を擾がし、二五一三年には、又、亞米利國合衆國の使節來り互市を求めしかば、德川幕府は清國の擾亂に顧み、物議を排して通商を許し、ついで歐洲諸國と條約を結べり。已にして、我國は國論沸騰し、下關に、鹿兒島に、屢外國と物議を起ししが、維新の後、外交の形勢一變し、露西亞との國境も、二五三五年全く、其落着を見るに至れり。

我が開國

第二節

朝鮮は仁祖以來、清國の東藩と稱して封册を受け、久しく孤立して、唯、我が德川氏と使聘を通じたるのみ

朝鮮の排歐政略

なりしに、二四五一年頃以來、基督教漸次侵入せしかば、朝鮮今王李熙の實父、大院君李昰應、政を執り、基督教を禁じ、又佛蘭西人を虐待せり、然るに清國は朝鮮を獨立國と稱し、之に關すること無かりしかば、佛蘭西は軍艦を以て江華灣を砲擊し、米艦亦、ついで漢江に入り、共に互市を迫りしが、皆功なかりき。

朝鮮の開國

第三節

かく、朝鮮は鎖國主義を取り、我が國の西洋と通商するを擯斥し、又、わが修好使を受けずして、我が雲揚艦を江華灣に砲擊せしかば、我が國亦朝鮮國を獨立と見做し、二五三六年、黑田清隆を朝鮮に使して其罪を問ひ、遂に朝鮮をして我が國と對等の交通を爲し、且、釜山の外、元山、仁川を開くべきことを約せしめたり、合衆國、英吉利、獨逸、露西亞、佛

臺灣征伐清國の物議

蘭西の諸國亦皆、我に倣ひて之と通商條約を結べり。

第四節　我が國と支那との交際久しく絶えしが二五三四年、我が琉球の民臺灣に漂着し、生蕃に殺害せられしかば、我が國は副嶋種臣を清國に遣はして、之と通商條約を結びしに、清國臺灣を以て化外の地と稱せしかば、我が國西鄕從道を遣はして之を伐たしむ。然るに、清國は前言を食みて、また臺灣を屬地と稱し、我が撤兵を要めたり。大久保利通、乃清國に使して談判を開き、償金を徴して漸、之と和せり。然れども我が沖繩縣を置くに及び、從來我が邦が琉球王を冊封して琉球藩王と爲せるを憤れる清國は、是に於て益平かならず。國際常に圓滑ならざりき。

日本と朝鮮との紛議

甲申の亂

天津條約

第二章　朝鮮に於ける日清兩國

第一節　已にして、朝鮮王李熙長じて大院君退き、外戚閔氏國權を握るに及び、大院君は鎭兵を使嗾して閔氏を討ち、日本公使館を燒けり、我が國井上馨を遣はし之が償金を徴し、公使館守備兵を置くことを諾せしむ。清國亦兵を派して公使館を護衛せり。

李熙の像

第二節　二五四四年に至り、朝鮮獨立黨の領袖、金玉均等、事大黨が清將袁世凱と結びて國政を恣にするを憤り、其首領、閔泳翊を殺し、援を日本公使に要む。已にして清

軍王宮に迫り、國王を擁するに至りしかば、我が公使は兵を收めて國に歸れり、之を甲申の亂といふ。我が國復井上馨を遣はして償金を收め、伊藤博文を清國に遣はし、李鴻章と天津に會し、兩國共に朝鮮の駐在兵を撤し、將來兵員派遣の要ある時は、互に行文知照して出兵すべきを約せり、之を天津條約と云ふ。

第三節

然るに、二五五四年、東學黨朝鮮に蜂起す。事大黨は袁世凱に賴りて援を得たり。我が國兵を出して居留民を保護し、清國に提議して、共に力を協せて朝鮮を誘掖せんとせり。然るに、清國は朝鮮を以て、東藩と稱し、之に應せず、在韓の彼我海陸軍已にして衝突せしかば、我が山縣有朋は平壤の清軍を破りて朝鮮と攻守同盟を成し、伊東祐亨亦黃海

に北洋水師を破りぬ。次いで旅順、威海衞皆陷り、澎湖嶋亦我が有となる、二五五五年、清國力竭き、李鴻章を遣して和を請ふ。我が伊藤博文、陸奥宗光、乃李鴻章と馬關に會商し、清國をして朝鮮の獨立を確認し、更に遼東半島、臺灣、澎湖列島を割き、二億兩の償金を納れしむるを約し、又、新に沙市、重慶、蘇州、杭州、を開くことを諾せしめたり。然るに露西亞、獨逸、佛蘭西、三國は、我が遼東を有するを以て、東洋平和に不利なりと、勸告せしを以て、我が國は深く時勢に鑑み、遂に遼東を還附して、三千萬圓の償金を收めたり。

第三章　日清戰後の現情

第一節

日清戰爭により、我が國は通商條約の改正を

了し、漸富强の運に向ふと雖も、清國及び朝鮮は其衰弱を看破せられて、益歐羅巴諸國の壓迫を受くるに至れり。

朝鮮の現狀

第二節　朝鮮は戰後、我が國の幇助により、官制を改め、國號を韓國と稱し、一時改善の政を施しし、守舊派は之を沮害して又紛擾を釀し、王妃は弑せられ、皇帝は難を露西亞公使館に避くるに至れり。是より露西亞の勢漸强く、我が國と協商して權勢を張らんことを努め、其他の諸國も種々の要求を提出し、韓國、頗、多事なり。

露獨兩國の土地借入

第三節　清國は戰に敗れて、三國に干涉を仰ぎければ、露西亞は其報酬として膠州灣借入を密約し、佛蘭西は東京境界の改正を要求せり。然るに、二五五七年、獨逸は其宣教師が山東に殺されたるを口實とし、膠州灣を占領し、清廷に迫りて九十九ヶ年間之を借入れしかば、露西亞は更に之を口實として清廷に迫り二十五ヶ年間旅順口、大連灣の借入、及び滿洲鐵道敷設を諾せしめたり。

英佛兩國の收得

第四節　英吉利は商勢の清國に衰へんことを憂ひ、清國に請求して、楊子江岸の不割讓を約せしめ、我が、兵の威海衛撤去に乘じ、二十五ヶ年間之を借入れたり。佛蘭西も二十五ヶ年間廣州灣の借入、及び東京鐵道の延長權を得、又、廣東、廣西、雲南、の不割讓を約せしめ、我が國亦福建の不割讓を誓はしめたり。

改革の失敗

第五節　光緒帝大に清國の衰運を慨し、康有爲等を用ゐて革新の政を始め、中外大に望を屬せしが、守舊派の諸王諸臣、頗、之を憂ひ、遂に皇帝を幽し、西太后垂簾の政を仰ぐに

義和團匪の亂

至りしかば、國内の革新は容易に行はれず。

第六節　今年春、義和團匪、山東に起り、興清滅洋を唱へて、獨逸人を襲擊し、又、基督教會を燒き、教民を殺ししかば、日本、英吉利、露西亞、佛蘭西、合衆國、獨逸、等各兵を發して公使館を護衛し、居留民を保護せしに、端郡王團匪と通じ、官兵外國兵と衝突せしかば、列國乃、海陸の兵を以て、太沽、天津、北京、山海關を陷る、是に於て光緒帝は西太后に伴はれて西走せり、今後の清國その形勢果して如何。？

東洋史略　終

參考表

第一　支那歷朝興亡表

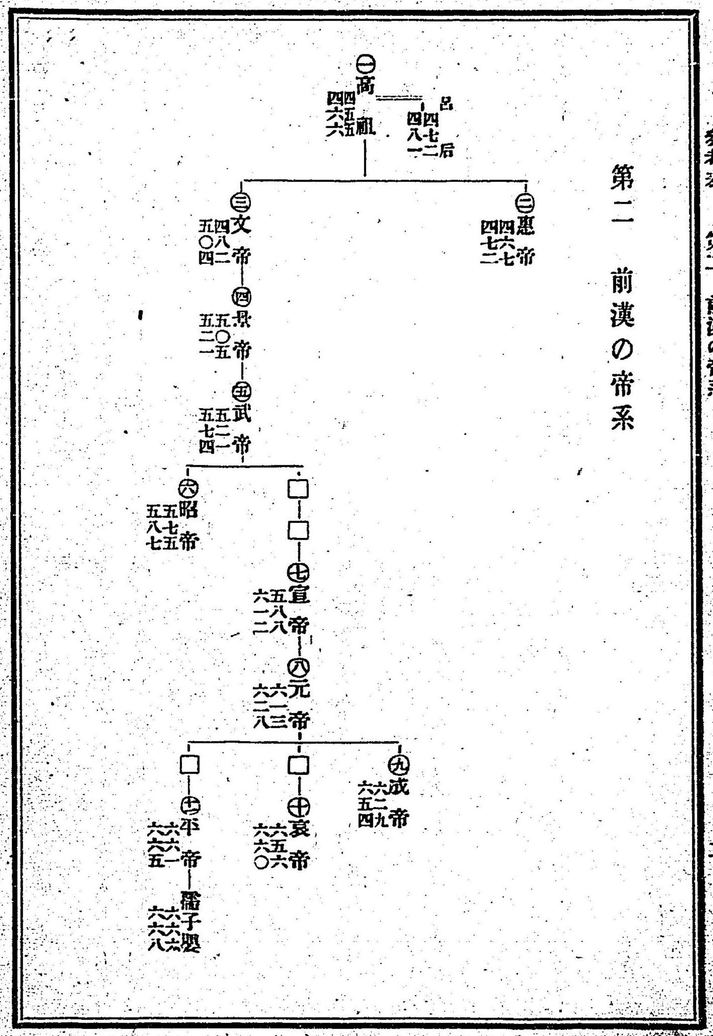
唐虞——夏（凡前一五四七～凡前一一二五）——殷（凡前一一二四～凡前四六三）——周（凡前四六三～凡前一一一）——東周（前一一一～前四〇五）——秦（四一五～四五四）

前漢（四五九～六六八）——新（六六九～六八五）——後漢（六八五～八八〇）——三國（八八九～九二三）——晉（九二三～九七六）——東晉（九七七～一〇八〇）

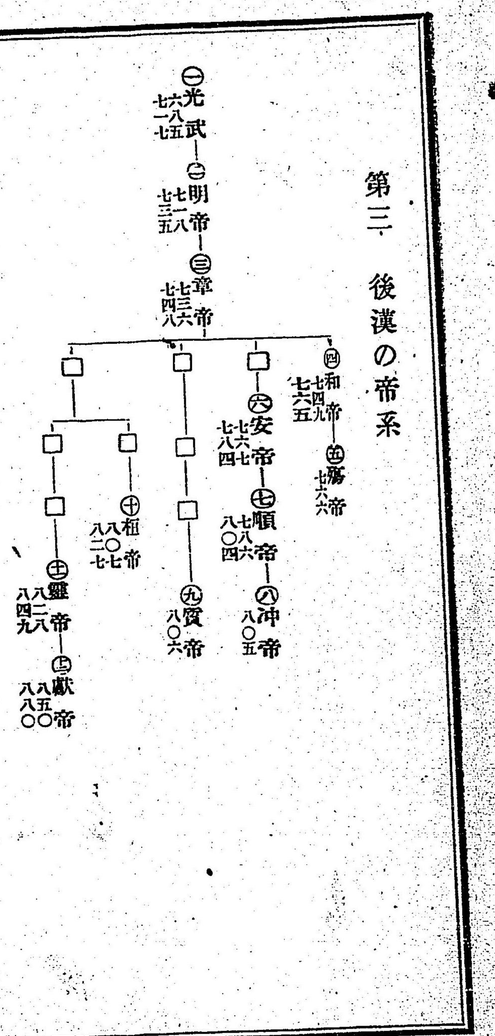
南北朝（一〇八〇～一二四八）——隋（一二四八～一二七八）——唐（一二七八～一五六七）——五代（一五六七～一六二〇）——宋（一六二〇～一七八七）——南宋（一七八七～一九三九）

元（一九三九～二〇二八）——明（二〇二八～二三〇四）——清（二三〇四～）

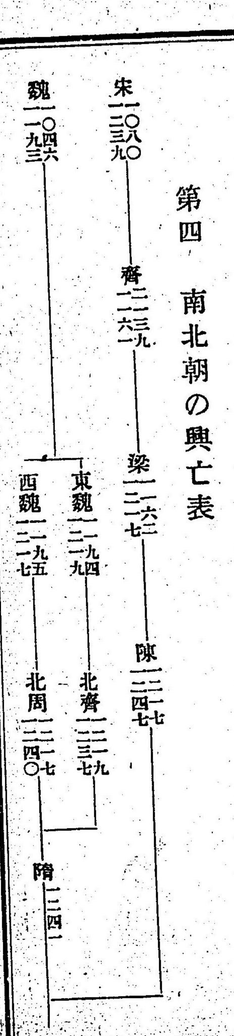
第一　前漢の帝系



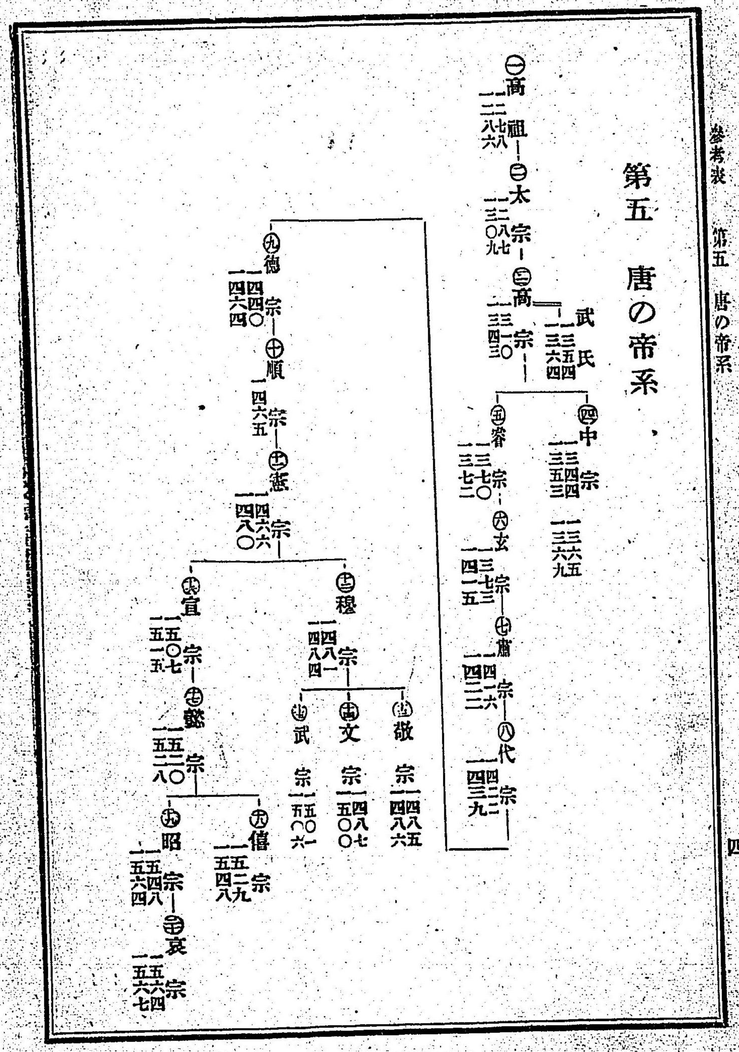
第三　後漢の帝系



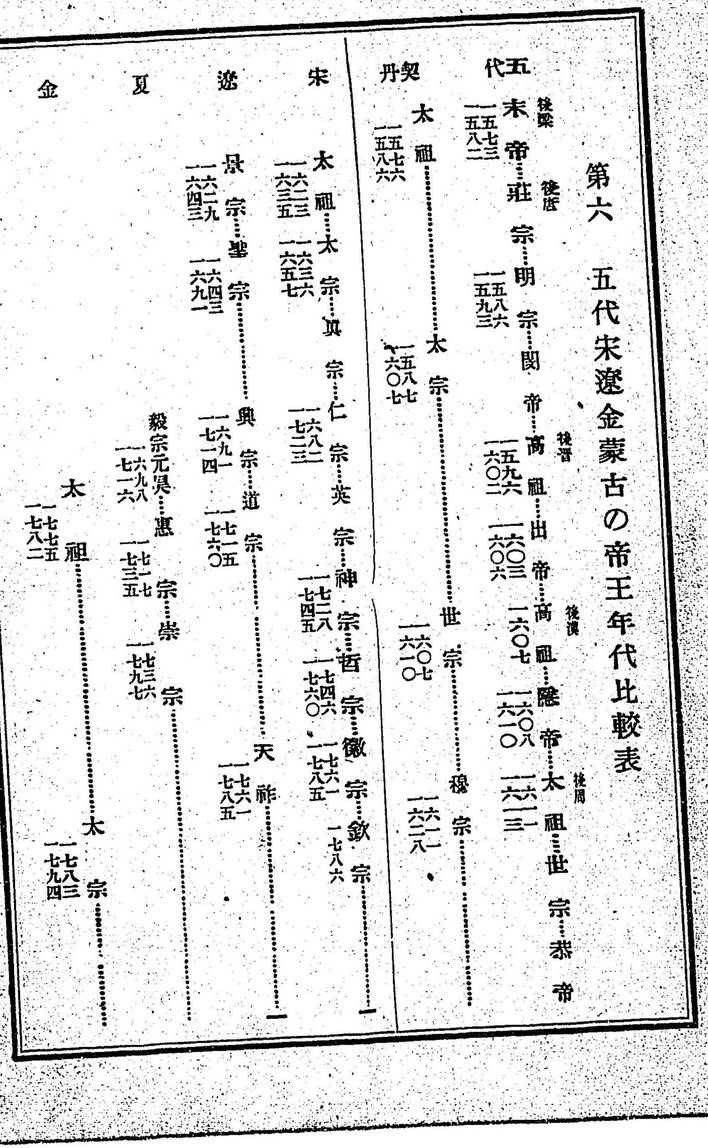
第四　南北朝の興亡表



第五　唐の帝系



第六　五代宋遼金蒙古の帝王年代比較表



南宋　高宗（一七八七―一八二二）……孝宗（一八五〇―一八八九）……光宗（一八五五―一八八四）……寧宗（一八八五―一九二四）……理宗

夏　仁宗（一八〇〇―一八五四）……桓宗（一八五四―一八六五）……襄宗（一八六六―一八七〇）……神宗（一八七一―一八八二）……獻宗（一八八三―一八八五）……德王睍（一八八六―一八八七）

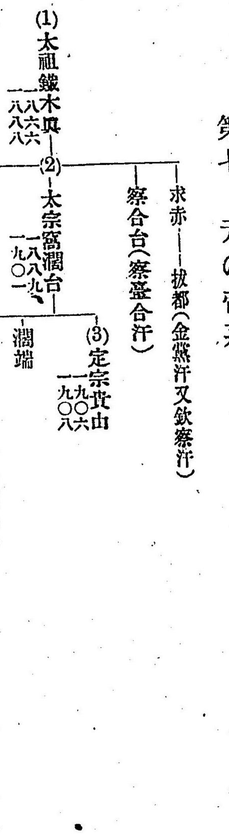
金　……熙宗（一七九五―一八〇九）……亮（一八〇九―一八二〇）……世宗（一八二一）……允濟（一八六九―一八七一）……宣宗（一八七二―一八八三）……哀宗（一八八四―一八九四）

蒙古　太祖（一八六六―一八八八）……太宗（一八八九―一九〇一）

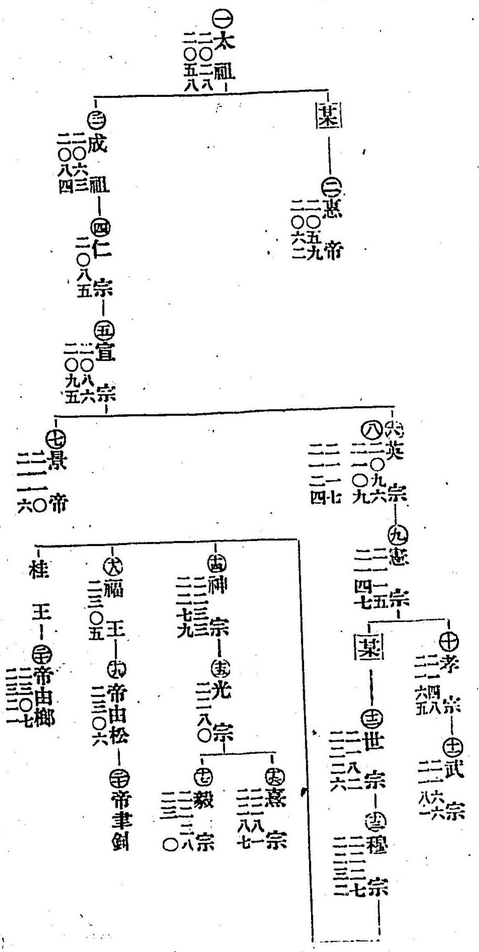
南宋　……度宗（一九二五）……恭宗……瑞宗……衛王（一九三八―一九三九）

蒙古　定宗（一九〇六―一九〇八）……憲宗（一九一一―一九一九）……世祖（一九二〇―一九五四）……

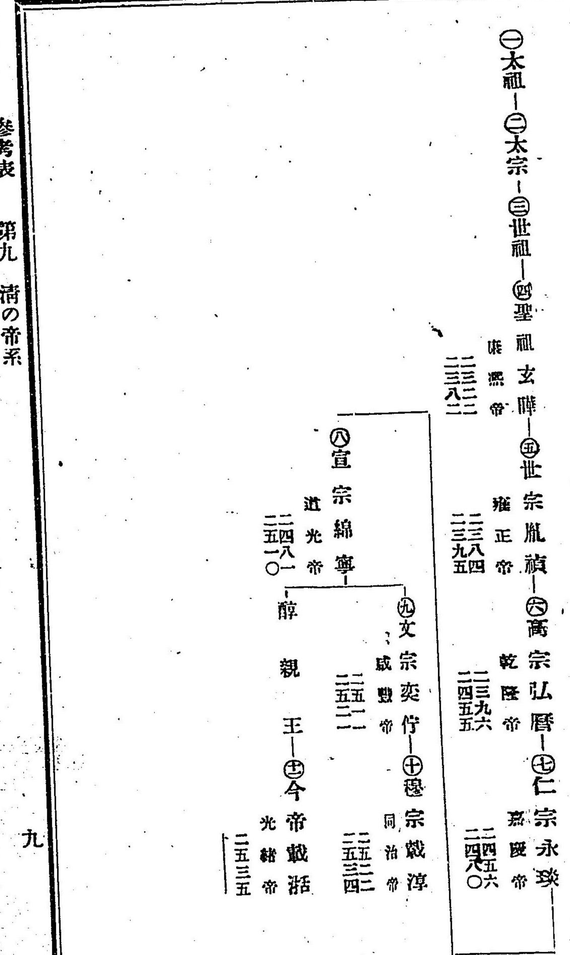
第七　元の帝系



第八　明の帝系



第九　清の帝系



第十　唐代佛教八宗の盛衰傳來表

宗名		開基	發達の模樣		傳來	
律	三國の末	法（タルマカヽ）時	後漢の發明發賢に備はる唐の法礪道宣二宗とす	明初	李鍵の朝唐鑑眞來朝して之を傳ふ	唐太宗世
三論	後秦	鳩摩羅什	隋の吉藏に備はる	唐中世	高麗の惠眼之を學び推古の朝來して之を弘む	唐末
淨土	東晉の末	廬山の遠社	道綽曇鸞等之を弘む	清	――	唐末
禪	梁	達磨	唐の代臨濟曹洞諸派に分る	清	後鳥羽の朝臨濟曹洞傳はる	唐末
天臺	陳	慧文	智顗之を廣む	唐末	桓武の朝最澄渡唐して道邃に受く	唐玄宗世
眞言	唐玄宗世	善無畏金剛智		唐末	桓武の朝空海渡唐して惠果に受く	玄奘
華嚴	隋	法順		唐末	聖武の朝新羅の審詳北道を傳へて來朝し良辨之を受く	
法相	唐太宗世	玄奘		唐末	齊明の朝我道服智達等玄奘に受く	

第十一　唐の中央官制

三省六部

- 中書省（中書令）
  - （左僕射）
    - 吏部（吏部尚書）官吏の銓陟を掌る
    - 戶部（戶部尚書）賦稅の事を掌る
    - 禮部（禮部尚書）禮儀の事を掌る
    - 兵部（兵部尚書）兵備の事を掌る
    - 刑部（刑部尚書）刑罰の事を掌る
    - 工部（工部尚書）土木の事を掌る
  - （右僕射）
- 尚書省（尚書令）
- 門下省（侍中）

第十二　清の官制

- 皇帝
  - 內閣
  - 軍機處
  - 六部
    - 吏部
    - 戶部
    - 禮部
    - 兵部
    - 刑部
    - 工部
  - 八衙門
    - 總理各國事務衙門
    - 海軍衙門
    - 理藩院
    - 督撫
      - 巡撫
      - 提督
    - 將軍
      - 吉林將軍
      - 黑龍江將軍
      - 奉天府尹行巡撫事

年表

年號ノ太キハ必ズ記臆ヲ要スルモノトス

日本暦	支那暦	事蹟
前一八〇〇頃		黄帝の統一
一五〇〇頃		アリア人印度に移る
四六三頃		周の建國
一一一		周室の東遷
一七四	懿德 二四	釋迦入滅
一八二	懿德 三二	孔子歿す
二五八	孝昭 七三	戰國七雄國起る
三二八	孝安 六〇	蘇秦六國の合從を成す
三三四	孝安 六六	歷山印度に侵入す
四〇五頃	孝靈 三五	周秦に滅さる
四一七頃	孝靈 四七	アンカ王の結集
四四〇	孝昭 七〇	秦始皇 二八
四五四	孝元 八	秦滅ぶ
四五九	孝元 一三	漢天下統一の大業を成す
四六七	孝元 二七	衛滿朝鮮王となる
五二一	開化 一八	漢年號を創む
五五三頃	開化 五〇	漢武帝朝鮮を平く
六〇四頃	崇神 四一	高句麗建國
六一〇頃	崇神 四七	漢宣帝五鳳
六六八	垂仁 三七	漢宣帝甘露
六八五頃	垂仁 五四	漢威大に西域に震ふ
七二〇頃	垂仁 八九	漢子嬰初始
七二七	垂仁 九六	王莽簒立
七五三	景行 二三	後漢光武帝即位
八二六	成務 三六	カニシュカ大王結集
八六〇	仲哀 九	佛教洛陽に入る
		後漢章帝永元 五
		後漢桓帝延熹 九
		後漢献帝建安 五
		太秦の船日南に至る
		神功皇后三韓を征したまふ

八八〇	神功攝政	二〇	後漢獻帝建安	二五	魏文帝即位
八八六	神功攝政	二六	蜀漢後主建興	四	波斯安息を滅ぼす
九二五	神功攝政	六五	晉武帝太始	八	晉魏を滅す
九四〇	應神	一一	晉武帝太康	元	晉呉を滅し天下を一統す
九四五	應神	一六	晉武帝太康	六	王仁論語千字文を我朝に奉る
九七六	仁德	四	晉愍帝建興	四	西晉滅ぶ
一〇四三	仁德	七一	東晉孝武帝大元	八	淝水の戰
一〇八〇	允恭	九	東晉恭帝元熙	二	東晉亡ぶ
一二一二	欽明	一三	梁元帝承聖	元	百濟佛像を我朝に奉る
一二一五	欽明	一六	梁敬帝紹泰	元	突厥柔然を滅し大國を立つ
一二四八	崇峻	元	陳後主禎明	二	隋天下を一統す
一二六七	推古	二〇	隋煬帝太業	三	日本隋に通す
一二七八	推古	二六	唐高祖武德	元	唐高祖即位
一二九六	舒明	八	唐太宗貞觀	一〇	基督教唐に入る
一三〇一	舒明	一三	唐太宗貞觀	一五	回々教徒波斯を滅ぼす

一三〇八	孝德大化	四	唐太宗貞觀	二二	王玄策印度に使す
一三二三	齊明崩後	二	唐高宗龍朔	三	百濟新羅に滅ぼさる
一三二八	天智	元	唐高宗總章	元	唐高麗勾を滅す
一三五〇	持統朱鳥	四	唐中宗嗣聖	七	則天武后國號を周と改む
一三六五	文武慶雲	二	唐中宗神龍	元	武后の亂平ぐ
一三七三	元明和銅	六	唐玄宗開元	元	唐玄宗帝即位
一四一五	孝謙天平勝寶	七	唐玄宗天寶	一四	安祿山反
一四七九	嵯峨弘仁	一〇	唐憲宗元和	一四	藩鎮を抑制す
一五六七	醍醐延喜	七	後梁太祖開平	元	朱全忠唐を滅ぼす
一五七六	醍醐延喜	一六	後梁太祖貞明	元	契丹阿保機帝と稱す
一五九六	朱雀承平	六	後晉高祖天福	元	晉後唐を滅ぼす高麗太祖朝鮮を一統す
一六二〇	村上天德	四	後周恭帝建隆	元	宋趙匡胤即位
一六三九	圓融天元	二	宋太宗大平興國	四	宋太宗天下を一統す
一六六四	一條寛弘	元	宋真宗景德	元	澶淵の盟
一七二九	後三條延久	元	宋神宗熙寧	二	王安石新法を行ふ

一七七五	鳥羽永久 三	宋徽宗政和 五	金太祖帝位に即く	
一七八五	崇德天治 二	宋欽宋宣和 七	遼亡ぶ	
一七八七	崇德大治 二	宋欽宗靖康 二	靖康の難	
一八六〇	土御門正治 二	南宋寧宗慶元 六	ホラズム國起　朱熹歿す	
一八六六	土御門建永 元	南宋寧宗開禧 二	成吉斯汗立つ	
一八八〇	順德承久 二	南宋寧宗嘉定 一三	蒙古ホラズムを滅す	
一八八七	後堀河安貞 元	南宋理宗寶慶 三	成吉斯汗歿	
一八九四	四條文曆 元	南宋理宗端平 元	金蒙古に滅ぼさる	
一九〇五	後嵯峨寛元 三	南宋理宗淳祐 五	羅馬法王使者を蒙古に通す	
一九二八	龜山文永 五	南宋度宗咸淳 四	蒙古高麗を外藩とす	
一九三一	龜山文永 八	南宋度宗咸淳 七	蒙古元と稱す	
一九三四	龜山文永 一一	南宋度宗咸淳 一〇	文永の役	
一九三九	後宇多弘安 二	南宋衛王拜興 二	元宋を滅す	
一九四一	後宇多弘安 四	元世祖至元 一八	弘安の役	
一九六八	後二條延慶 元	元武宗至大 元	元武宗窩濶台汗國を降す	

二〇二八	後村上正平 二三	明太祖洪武 元	明朱天璟即位	
二〇二九	後村上正平 二四	明太祖洪武 二	帖木兒サマルカンドに都す	
二〇五二	後龜山元中 九	明太祖洪武 二五	朝鮮太祖李成珪即位	
二〇六二	後小松慶永 九	明惠帝建文 四	アンゴラの戰	
二〇六三	後小松慶永 一〇	明成祖永樂 元	靖難の役平成祖即位	
二一〇九	後花園寶德 元	明英宗正統 一四	土木の變	
二一五八	後土御門明應 七	明孝宗弘治 一一	ヴスコダガマ印度に達す	
二一七〇	後柏原永正 七	明武宗正德 五	葡萄牙人ゴアを開く	
二一八五	後柏原大永 五	明世宗嘉靖 四	パーベル印度に起る	
二一八九	後奈良享祿 二	明世宗嘉靖 八	王守仁歿	
二二〇〇	後奈良天文 九	明世宗嘉靖 一九	大越兩分す	
二二〇九	後奈良天文 一八	明世宗嘉靖 二八	葡萄牙人日本に至る	
二二二三	正親町永祿 六	明世宗嘉靖 四二	倭寇の戰	
二二二四	正親町永祿 七	明世宗嘉靖 四三	露西亞明に通す	
二二三一	正親町元龜 二	明穆宗隆慶 五	西班牙人呂宋を取る	

二二四〇	正親町天正	八	明神宗萬曆	八	西班牙人日本に至る
二二四一	正親町天正	九	明神宗萬曆	九	葡萄牙人澳門を占領す
二二五六	後陽成慶長	元	明神宗萬曆	二四	第一朝鮮役媾和
二二六〇	後陽成慶長	五	明神宗萬曆	三八	英吉利人東印度商會を立つ
二二七四	後水尾慶長	一九	明神宗萬曆	四二	滿洲起る
二二九四	明正寛永	一一	明思宗崇禎	七	大清建國
二二九六	明正寛永	一三	明思宗崇禎	九	日本領國朝鮮清の封冊を受く
二三〇四	後光明正保	元	明思宗崇禎	一七	李自成帝を稱す　明滅ぶ
二三二一	後西院寛文	元	明永明王永曆	一五	清聖祖明の遺孽を平く
二三三三	靈元延寶	一三	清聖祖康熙	一二	三藩の亂
二三四三	靈元元和	三	清聖祖康熙	二二	臺灣清領となる
二三四九	東山元祿	二	清聖祖康熙	二八	尼布楚條約成
二三六七	東山寛永	四	清聖祖康熙	四六	オーランゼブ歿
二三八八	中御門享保	一三	清世宗雍正	六	恰克圖條約成
二四二〇	桃園寶曆	一〇	清高宗乾隆	二五	天山南北路平定

二四四二	光格天明	二	清高宗乾隆	四七	フハチヤクリ暹羅王となる
二四四六	光格天明	六	清高宗乾隆	五一	安南統一
二四五一	光格孝政	三	清高宗乾隆	五六	基督教朝鮮に入る
二四六三	光格享和	三	清仁宗嘉慶	八	安南統一越南と稱す
二四六四	仁孝文化	元	清仁宗嘉慶	九	モーガル帝英の保護を受く
二四八八	仁孝文政	九	清宣宗道光	六	アフガニスタン統一す
二四九九	仁孝天保	一〇	清宣宗道光	一九	鴉片問題起る
二五〇二	仁孝天保	一三	清宣宗道光	二二	南京條約成る
二五〇九	孝明嘉永	六	清文宗咸豐	三	合衆國船浦賀に至る
二五一八	孝明安政	五	清文宗咸豐	八	天津條約成　愛琿條約成
二五二〇	孝明萬延	元	清穆宗同治	三	北京條約成
二五二二	孝明文久	二	清穆宗同治	元	佛蘭西南部交趾を取る
二五二三	孝明文久	三	清穆宗同治	三	長髮賊平く
二五二六	孝明慶應	二	清穆宗同治	五	佛蘭西江華灣を侵す
二五三四	今上明治	七	清穆宗同治	一三	日本臺灣を征す

二五三五	今上明治	八	清光緒	元	律太問題決す
二五三六	今上明治	九	清光緒	二	日韓條約成
二五四〇	今上明治	一三	清光緒	六	曾國藩露西亞と伊犂境界を定む
二五四三	今上明治	一六	清光緒	九	安南東京地方を佛國に讓る
二五四四	今上明治	一七	清光緒	一〇	朝鮮甲申の亂
二五四五	今上明治	一八	清光緒	一一	清佛戰爭終日清天津條約成
二五四六	今上明治	一九	清光緒	一二	英吉利緬甸を滅ぼす
二五四七	今上明治	二〇	清光緒	一五	英吉利女王印度女帝となる
二五五四	今上明治	二七	清光緒	二〇	日清戰爭起
二五五五	今上明治	二八	清光緒	二一	馬關條約成　日本遼東を清に還附す
二五五七	今上明治	三〇	清光緒	二三	獨逸膠州灣を占領す
二五五八	今上明治	三一	清光緒	二四	獨逸膠州灣を借入る
二五五九	今上明治	三二	清光緒	二五	露國大連旅順を英國威海衛を佛蘭西廣州灣を借入る
二五六〇	今上明治	三三	清光緒	二六	義和團匪起聯合軍北京を陷る

索引

ア

愛理條約　九〇
アクバール　七三
阿骨打　五三
アメカ　二四
アッサム　八五
安南　一、二〇、四二、六二、七五、八二
アフガニスタン　八六
鴉牙戰爭　八七
安倍仲麿　四四
阿曇比邏夫　四〇
阿房宮　一〇
履門　八七
阿剛寧　六三
鞏里不哥　六二
アレキサンダー　二三
安息　一七、二二
俺答　七五
安祿山　四四、四五

イ

伊尹　二
威海衛　九九、一〇一
倭寇　七六、七七
伊東祐亨　九八
伊藤博文　九二、九九
犬上御田鍬　四二
英吉利　七四、八五—八七、八九、九一、九三—九五
印度　太古　二二　佛教　二三、二四
ウヂャーナ　四一　温都敦　四一
チムール　六八　モーガル　七三
歐洲人　七四　英人　八五—帝國

ウ

禹　二
于謙　七〇
ウヂャーナ　四一
烏孫　一八
ウラヂオストック　九〇
雲南　一〇一

エ

衛右渠　一六
衛青　一七
英宗(明)　七〇
營宗　四四
衛滿　一六
愛親覺羅、努兒哈赤　七九
也先　七〇

呂氏ノ亂　一四　七國ノ亂　一五
武帝　一五―一七　宣帝　一八　末路　一九　學術　二七
漢(晉代)　二九
漢(五代)　五〇
關羽　二五
桓温　三〇
韓琦　五二
韓信　一三
鑑眞　四八
廣西　一〇一
韓世忠　五五
韓侂胄　五六
廣東　八七、八九、一〇一
カンニング　九一
韓非子　九
咸豐帝　八八
東埔寨　七〇、八二
韓愈　四七、四八
咸陽　一二、一三

ガ

垓下　一三
岳飛　五五
樂毅　六
合從　六
合衆國　九〇、九三、九五
顏淵　八
顏杲卿　四五
顏師古　四七
顏眞卿　四五、四八
嚴嵩　七〇

キ

耆英　八七
箕子　三、一六
徽宗(宋)　五四、五八
毅宗(明)　七九
契丹　五〇
欽察　六〇、六一、六六、六八
吉備眞備　四四
熙豐黨　五三
恰克圖　八六
仇首　三六
匈奴　秦代　一一　漢高　一七　武帝　一七―一八　宣帝　一八　新　一九　後漢　二一　南匈奴　二九　三〇
恭愍王　七六
許遼　四五
キプ　七二、九二
金　起　五三　遼　五四　宋亡　五五　南宋　五五、五六　世宗　五六　衰　古　六〇　亡　六〇
金玉均　九七
金川　八二

越　五
越南　九二、九三
葉赫　七九
耶律阿保機　五〇
エリオット　八七
耶律大石　五四
燕　五
燕　二九
燕王棣　六九
燕京　五四、六九
袁紹　二五
袁世凱　九七

オ

王安石　五二、五三、五八
王維　一六
王羲之　三三
王險　一六
王守仁　七一
王振　七〇
王通　四七
王導　三〇
王鳳　一九
王莽　一九
王猛　三〇
歐陽脩　五八
オランゲゼブ　七三
窩濶台　六〇
窩濶台汗國　六六
オスマントルコ　六八
小野妹子　三七
幹離不　五五
阿羅本　四二
温祚　三四

カ

夏　二
夏(宋代)　五二、五四、六〇
回紇　四一、四九、五〇
戒日王　四一
賈誼　二七
郭威　五〇
郭子儀　四五
嘉慶帝　八六
賈后八王ノ亂　二八
カシュガル　八二
賈似道　六一、六二
嫌居世　三四
霍去病　一七
霍光　一八
和帝(後漢)　二一
カピラ　二二
加羅　三四
カルカッタ　九一
韓(戰國)　五
漢　起　一一　統一　一三　高祖　一三

欽宗(宋) 五四
金陵 六七

ギ

魏(三國) 二五、二六
魏(後魏) 三〇、三一、三二
魏徵 三九
牛僧儒 四六
堯 二
義和團 一〇二

ク

クールベー 九三
孔穎達 四七
クシナガラ 二三
百濟 三四、三五、三六、四〇
忽必烈 六一
鳩摩羅什 三五
クライヴ 八五
基督教 七一、七三、八六、九三、九四
黑田清隆 九五

ケ

景教 四三、四九
耿精忠 八〇
景帝(漢) 一五
惠帝(明) 六九
景帝(明) 七〇
桀 二
建康 二九、三二
建業 二六
憲宗(蒙古) 六一
憲宗(唐) 四六
獻帝(後漢) 二五
乾隆 八一、八二

ゲ

祆教 四九
元山 九五
玄奘 四八
玄宗 四四
元帝 二九
元父惠 八三
元祐黨 五三

コ

孔安國 一五、二七
庚寅 七二
項羽 一二、一三
紅河 九三
江華灣 九三
コーカンド 九二
康熙帝 八〇
鎬京 三
高句麗 三四、三六、三八、四〇
孔子 七八
洪秀全 八八
膠州灣 一〇〇、一〇一
侯昌 三

甲申ノ亂 九七
高祖(漢) 一三、一四
高祖(唐) 三八、三九
高宗(唐) 四一、四二
高宗(南宋) 五四
高宗(清) 八一、八三
孝宗(宋) 五六
交趾 六一、六四
後趙 二九
黃帝 二
胡居仁 七〇
顧憲成 七七
光武帝 二〇
孝文帝(魏) 三一
高麗 五二、五九、六一、六三、七六
康有爲 一〇一
昆陽 二〇

ゴ

吳 五
吳(三國) 二六
ゴア 七三
後漢 起 二〇 匈奴 二一 西域 二二 佛教 二四 末路 二五 學術 二七
五胡 三一
吳三桂 七九、八〇
吳楚七國ノ亂 一五
五代 四九、五〇
吳道玄 四八

サ

蔡愔 二四
崔胤 四九
西鄉從道 九六
蔡州城 六〇
蔡襄 五八
蔡倫 二七
沙市 九九
サマルカンド 五四、六〇
三韓 一七
三國 二五、二六
三藩ノ叛 八〇、八一

シ

子嬰(秦) 一三
始皇 一〇、一一
肅宗(唐) 四五
子思 八
史思明 四五
司馬懿 二六
司馬睿 二九
司馬炎 二六
司馬光 五三、五八
司馬遷 一五、二七
司馬達等 三六
釋迦 二二、二三

謝玄 三〇
シャム 六四、七〇、七三、八二
謝靈運 三三
上海 八七
周 三、四、六、七—一〇
周(唐代) 四三
周(五代) 五〇
周公 三七
舟山島 八七
周敦頤 五七
周勃 一四
朱彝尊 八四
朱熹 五六
叔孫通 一四
朱元璋 六七
朱全忠 四七
朱棣 三四
舜 二

春申君 六
春秋 四、五
書 九、二七、四八
商鞅 一三
蕭何 一三
昭帝(漢) 一八
昭烈帝 二五
諸葛亮 二六
蜀漢 二五—二六
新羅 起 三四 神功 三四、三五
三韓 三六、三七 任那 三七 爭
三九 唐ニ降 四〇 亡 五一
シリア 六一
子路 八
新 一九
晉(春秋) 四、五
晉 二七—二九
晉(五代) 五〇

清 起 七九 明ヲ滅 七九、八〇
三藩ノ反 八〇 聖祖 八〇 臺
灣平 八一 世宗 八一 高宗
八一—八三 鴉片 八七 長髮賊
八八、九〇 英佛戰 八九、九〇
露 八九、九〇 光緒 九二—一〇二
清佛 九三 朝鮮 九七、九八
辰韓 一七
神宗(宋) 五二
眞宗(宋) 五一
神宗(明) 七七
身毒 一七
信陵君 六

ジ

シャヴ 六四、七〇
儒學 周 七、八 秦 一〇 漢高
一四 武帝 一五 漢 二七 殘
漢 二七 晉南北朝 三三 隋唐

四七、四八 宋 五七、五八 元明
七一、七二 清
柔然 三二
準噶爾 八一
順宗(元) 六七
女眞 五三
徐達 六七
常遇春 六七
秦 經公 四、五 孝公 六 一統
六 始皇 一〇—一二 二世 一二
亡 一二
秦(前) 三〇
秦檜 五六
成吉斯汗 五九
仁川 九五
仁祖(朝鮮) 九四
仁宗 八六

ス

速不台 六〇
西班牙 七四
スマトラ 六四、七〇

ズ

隋 三七、三八
松花江 九〇

セ

齊桓公 四
齊(南朝) 三二
西魏 三二
靖康ノ難 五四、五五、
世祖(元) 六二—六四
成祖(明) 六九、七〇
世祖(清) 七九
聖祖(清) 八〇
世宗 五六
聖宗(遼) 五一、五二
成宗(元) 六六

西楚霸王 五二
清談 二八
成帝(漢) 一九
西突厥 三二
靖南王 八〇
靖難ノ役 六九
盛樂 三〇
錫蘭 七三
赤壁ノ戰 二五
石勒 二九、三五
世親 三五
石敬塘 五〇
節度使 四四、四六
薛瑄 七〇
澶淵ノ盟 五一
戰國 五
宣仁太后 五三
宣祖(朝鮮) 七七

宣宗(清) 八六
鮮卑 二一、二九

ソ

楚 四—六
宋(南北朝) 三〇
宋 太祖 五一 制度 五一 澶州役 五一 仁宗 五二 神宗 六三
靖康ノ難 五四、五五
曹吉祥 七〇
曾鞏 五八
曾國藩 八八、九二
曾參 八
莊子 九
宋室ノ南渡 五五
宋襄公 四五
曹操 二五、二六
曹丕 二五
宋濂 七二
蘇洵 五八
蘇軾 五三、五八
祖承訓 七七
蘇轍 五〇
蘇秦 六
外蒙古 八一
孫權 二六
孫堅 二六
孫子 九

タ

ターキスタン 八〇
太沽 八九
大食 四二
韃靼 七〇、七五
太院君 九五
大越 七五
大月氏 一七、二一、四二
太似 三
太祖(金) 五三、五四
太祖(明) 六七、六八
太祖(朝鮮) 七六
太祖(滿洲) 七八
太宗(唐) 三九—四二
太宗(蒙古) 六〇
太帝 二六
太武帝 三一
大平天國 八〇
大遼灣 一〇一
臺灣 三八、七四、八〇、八一、九〇
拓跋珪 三〇
端郡王 一〇二

ダ

代 二九、三〇
代宗(唐) 四五
達磨 三五
韃王 六

チ

西藏 八一
帖木兒 六八
チャンドラグプタ 二三
占城 六四
紂 三
中宗(唐) 四三
哲伯 六〇
趙 五
長安 二〇、二九、三八、四七
張東之 四三
張儀 六
趙匡胤 五〇、五一
張騫 一七
趙高 一二
張載 五八
趙充國 一八
張巡 四五
張世傑 六三
朝鮮 一六、三四—三七、三九—四〇、七六、九四、一〇〇
長髮賊 八八、九〇
張飛 二五
張邦昌 五五
張良 一三
褚遂良 四八
趙普 五一
陳(南朝) 三二
陳平 一三、一四
沈雄敬 七七
沈周 七二

ヂ

察合台 六〇、六八

ツ

吐蕃 四一、五二、六一

テ

程頤 五三、五七
鄭吉 一八
鄭經 八〇
鄭玄 二七
程顥 五七
鄭衆 二七
程朱學 五八
鄭昭 八二
鄭成功 八〇
狄仁傑 四三
哲宗 五二
鐵木眞 五九
天津條約 八九、九八

デ

田單 六

ト

唐 起 三八 貞觀 三九 官制 三九 三韓平 四〇 突厥 四一

西域 四二 武氏 四三 韋氏 四四 開元 四四 安史 四四、四五 末路 四六—七 亡 四七 文化 四七—四九
唐(五代) 五〇
湯 二
鄧禹 二〇
陶淵明 三三
東學黨 九八
董其昌 七二
東魏 三二
唐虞 一二
寶憲 二一
黨錮ノ獄 二五
東晉 二九、三〇
董仲舒 一五、二七
東突厥 三二
東林黨 七八
徳宗 四五
吐谷渾 三八、四一
杜如晦 三八
突厥 三二、三八、四〇
土耳古 六八
東京 九三

ド

獨逸 九五、九九、一〇〇—一〇二
豆貝 五四
道希 三五
道敎 二八、四九
道光帝 八七
道隆 五九
度宗 六二
土木ノ變 七〇

ナ

乃滿 五四、六〇
南越 一一、一六
南京 八七
南宋 高宗 五五 寧宗 五六 金 亡 六〇、六一 蒙古 六二 亡 六三
南北朝 三一、三二

ニ

ニコライスク 八九
二世皇帝 一二
日本 三韓 一七、三四—三七 佛敎 三六 隋 三七 唐 四〇—四二、四八、四九 宋 五九 元 六三、六四 明 六九 諸外國 七三—七八
牛莊 九〇

ネ

寧宗(宋) 五六
尼布楚 八一

ハ

海都 六六
海防 九三
白蓮敎 八六
八思巴 七〇
白河 八九
河內 九五
范仲俺 五二
班超 二一
范蠡 五

バ

バーベル 七三
馬援 二〇
馬韓 一六
馬關 九九
バカン 六四
馬貫與 五八
バヨヤゼット 六八
坂都 六一
伯顏 六二
馬融 二七
波羅門 二二
パンコック 八二
萬里長城 一一

ヒ

温都敎 四一
渭水ノ戰 三〇

ビ

緬甸 六四、八二、九一
閔泳翊 九七

フ

ファヤチャクリー 八二
福建 一〇一
符堅 二九、三〇、三五、三六
夫差 五
釜山 九五
フランシス・ザヤエール 七三
旭烈兀 六一
佛蘭西 八二、八五、八九、九二—九三、九五、九九、一〇一

ブ

武王 三
武氏ノ亂 四三
武宗 六六
佛敎 興 二二、二三 結果 二三
アメカ 二三 カニシュカ 二四
兩分 二四 漢 二四 大乘 三五
晉 三五 譯 三五 韓 三六 日
本渡來 三六 唐 四八 譯 四八
宋 五九 元、明 七一
武帝(漢) 一五、二六
武帝(東晉) 三六
武帝(梁) 三五
文王 三
文成帝 三五
文宗 八九

文徴明 七二
文帝(漢) 一四、一五
文帝(魏) 二五
文帝(隋) 三二、三七、三八
文天祥 六三

ヘ

平王 四
平壌 七七
碧蹄館 七七
汴京 五四、五五、六〇

ベ

米芾 五八
辨韓 一七

ペ

北京條約 九〇
波斯 四三、七二、八〇

ホ

方孝孺 七一
澎湖島 九九
彭春 八一
北齊 三二
奉天府 七九
ホラズム 六〇、六一
和蘭 七四、八〇
香港 八七

ボ

房玄齢 三九
ボカラ 七三、九二
墨子 九
穆宗 九八
渤海 五〇
慕容氏 二九
八剌 六〇
ポルチオ 七〇

ポ

ポンダシェリー 七四
葡萄牙人 七三、七四

マ

摩尼 四九
澳門 七三
マガタ 二三
マテオリッシ 七三
蒙哥 六一
滿洲 七七
マラッカ 七〇
マンダレー 九一

ミ

任那 三四、三五
明 起 六七 靖難 六九 永樂 七〇 木木役 七〇 外征 七〇 文學 七一 安南 七五 倭寇 七六、七七 秀吉 七七 亡 七九

メ

明帝(後漢) 二〇
馬鳴 三五

モ

モーガル 七三、九一
孟洪 六〇
毛奇齢 八四
蒙古 起 五九 夏亡 六〇 金 六〇 西征 六〇 金亡 六〇、六一 西征 六一・南征 六一 宋亡 六二、六三 日本 六四 世祖 六四 交通 六五 汴國 六六 亡 六七

ヤ

雅克薩 八一
ヤールカンド 八二
山縣有朋 九八

ヨ

楊堅 三二
楊子 九
楊太眞 四四
煬帝 三七、三八
陽明學 七〇

ラ

洛陽 二〇、二五、三一、四五、四七、六〇
剌摩敎 六六、七五、七六

リ

李淵 三八
李昞 七七
李懷仙 四五
李熙 九五、九七
陸秀夫 六三
李元昊 五二
李鴻章 八〇、九八、九九
李綱 五四、五五
李斯 六、一〇
李思訓 四八
李自成 七九
李如松 七七
李成珪 七六
李世勣 四一
理宗 六〇
陸九淵 五八
李德裕 四六
李林甫 四四
劉永福 九三
劉淵 二九
隆基 四四
琉球 九六
劉玄 二〇
劉秀 二〇
龍樹 三五
劉仁願 四〇
柳宗元 四八
劉仁軌 四〇

劉知遠 五〇
劉備 二五
劉裕 三〇
遼 興 五〇 聖宗 五一 澶州
五一 極盛 五二 亡 五四
梁(南朝) 三二
梁(五代) 五二
呂氏ノ亂 一四
遼東 九九
旅順口 九九、一〇一
臨安 五五、六二
林邑 三八
藺相如 六
林則徐 八七
ル
露西亞 七五、八一、八六、八九、九〇、九二、九三、九五、九九、一〇〇
呂宋 七四
レ
黎利 七五
列子 九
廉頗 六
連衡 六
ロ
老子 九
ワ
ワイシヤリ 二三
ワスコダガマ 七三
王仁 三五
井
韋后 四三、四四
井上馨 九七、九八
エ
瓦剌 七〇、七五

明治三十四年三月十八日印刷
同 三十四年三月廿二日發行

東洋史略
定價金六拾五錢

著作者 小川銀次郎

發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

右社長 原亮三郎
東京市下谷區龍泉寺町四百十番地

代表者

印刷所 株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

賣捌所 各府縣特約販賣所

著作權所有

金港堂書籍株式會社發行教科用圖書販賣所

（東京府）

東京市　金昌堂
同　林平次
同　播磨屋

（神奈川縣）

武藏國橫濱　田沼商店
同　天野弘集堂
同　伯瀨權次郎
同　橫濱　竹川新四郎

（靜岡縣）

駿河國靜岡　廣瀨市藏
同　吉見義助
同　勝見儀次
遠江國掛川　三原屋佐藏
同　濱松　谷島屋源三郎

（愛知縣）

尾張國名古屋　川瀨代助
同　片野東四郎
同　三輪文次郎
三河國豐橋　高須廣次

（三重縣）

伊勢國四日市　岩田與七
同　津　國四國書林株式會社

（岐阜縣）

美濃國岐阜　郁文堂

同　大垣　岡安慶助
同　上田源藏
飛騨國高山　平田鈴吉

（滋賀縣）

近江國大津　島林專次郎
同　淡海堂
同　彥根　廣田七次郎

（京都府）

京都市　村上勘兵衛
同　大黑屋書店

（大阪府）

大阪市　柳原喜兵衛
同　松村九兵衛

（奈良縣）

大和國奈良　國書卸賣合資會社
同　阪田一郎

（和歌山縣）

紀伊國和歌山　宮井宗兵衛
同　三宅小二郎

（兵庫縣）

播磨國神戶　吉岡支店
同　熊谷幸助

但馬國豐岡　石田文藏
淡路國洲本　中井正吉

（岡山縣）

備前國岡山　武內彌三郎
同　森博文堂
美作國津山　仁科照太郎
備中國倉敷　壹井朝太郎

（鳥取縣）

因幡國鳥取　廉谷旭日堂
伯耆國米子　今井象文

（島根縣）

出雲國松江　川岡清助
同　大芦庄文會堂
同　安達水郎
石見國濱田　共榮堂

（廣島縣）

安藝國廣島　積善館支店
備後國尾ノ道　田上三芸堂
備後國福山　桑田玉香堂

（山口縣）

周防國山口　桂山陽堂

金港堂書籍株式會社發行教科用圖書販賣所

周防國山口　宮川臣吉
同　岩國　白銀伊兵衛
長門國萩本　生田新一堂
同　長府　村田梅龍
同　萩　藤川東輔

（德島縣）

阿波國德島　黑崎榮二
同　井關柔吉
同　小野喜代次
同　勝町

（高知縣）

土佐國高知　澤本駒吉

（香川縣）

讃岐國高松　清野信七
同　宮脇仲次郎
同　入江開文舍
同　丸龜

（愛媛縣）

伊予國松山　向井藏二郎
同　土肥與平
同　金川支店
同　門司

（福岡縣）

筑前國博多　眞海書店
同　同　積善館支店
筑前國博多　森岡榮

筑後國久留米　彌竹儀平
同　田中幸二郎
同　佐野長七
豐前國豐津
豐前國豐後　佐賀縣　河內壯助

（熊本縣）

肥後國熊本　長崎次郎

（長崎縣）

肥前國長崎　安中半三郎

（大分縣）

豐後國大分　雙治平
豐後國中津　甲斐梅津書店

（鹿兒島縣）

薩摩國鹿兒島　吉田幸兵衛

（宮崎縣）

日向國宮崎　津野書店
同　松井義雄

（福井縣）

越前國福井　品川太右衛門
同　敦賀　山上宗兵衛

若狹國小濱　吉岡昌米郎

（石川縣）

加賀國金澤　近田太三郎
同　宇宇都宮書店
同　小松

（富山縣）

越中國富山　中田清兵衛
高岡　學

（新潟縣）

越後國新潟　目黑十郎
同　松田周平
同　桑張治直
同　高山
同　水原
同　西村六平
同　三條
佐渡國河原田　中野書店
山島萬平

信濃國長野　西澤喜太郎
同　水本琴
同　高美書店
同　松榮堂
同　坂榮次郎
同　宮都文堂
同　上諏訪朝陽館
飛騨　都鄰
同　岡本
同　石村山
同　荻原盛文

90
97

金港堂書籍株式會社發行教科用圖書販賣所

山梨縣

- 同　野澤　岩下袈裟店
- 同　甲斐國甲府　內藤書店
- 同　柳正堂
- 同　武藤國浦和　高野幸吉
- 同　川越　水村岩三郎
- 同　明文堂

埼玉縣

群馬縣

- 同　上野國前橋　高橋常藏
- 同　高崎　柴田益平
- 同　宮岡　本田清三郎

千葉縣

- 同　下總國千葉　多田屋支店
- 同　船橋　大木內嘉兵衛
- 同　關宿　野口注連吉
- 同　上總國東金　多田屋本店
- 同　大多喜　惠比壽屋書店
- 安房國北條　島海書店

茨城縣

- 常陸國水戸上市　川又銀藏
- 同　石口　高野清次郎
- 同　土浦　伊沼彌助

栃木縣

- 同　宜鶴　寺田清兵衛
- 同　下館　須藤市右衛門
- 同　下野國太田原　田代太郎三郎
- 同　足利　三泉堂

福島縣

- 同　岩代國福島　博向堂
- 同　若松　中平堂
- 同　羽賀川　田中太平
- 同　喜多方　橋本
- 同　岩城國中村　湖野作右衛門
- 同　佐藤與七

宮城縣

- 同　陸前國仙臺　高橋藤七
- 同　同　木村祐之
- 同　同　藤崎文助
- 同　同　有千閣
- 同　佐助書店

山形縣

- 同　羽前國山形　五十嵐太右衛門
- 同　米澤　索月堂
- 同　長井　文晨堂
- 同　新庄　盛文堂
- 同　鶴岡　風間五右衛門
- 同　大泉　菅助
- 日向源吉

秋田縣

- 同　羽後國秋田　地主文藏
- 同　羽後國酒田　白崎菅助
- 羽後國酒田　鈴木喜八

巖手縣

- 同　羽後國秋田　成見清兵衛
- 同　橫手　大澤鮮造堂
- 同　增田　東海林直太郎
- 同　大曲
- 同　佐藤庄兵衛
- 同　盛岡　上村才六
- 同　花卷　菊地忠太郎
- 同　一ノ關　佐藤菅平
- 陸前國高山　菊地直藏

青森縣

- 同　陸奥國弘前　今泉謙次郎
- 同　青森　今泉支店

北海道

- 渡島國函館　魁文舍
- 石狩國札幌　左右書
- 後志國小樽　太南川
- 同　函館

003374-000-2

90-97

東洋史略

小川 銀次郎/著

M34

ACC-1883